學友會報

第百五十九號

大正十一年七月十日發行

神戸高等商業學校學友會

七月號目次

○論　壇

非ユークリッド空間の比喩的説明……佐藤　教授
海洋の自由……島本　教授
規範會計學の發端……矢部　利茂
コール氏ナショナルギルド論の梗概……近藤　備

○想　華

シエリーの經濟生活……内多　教授
或る聖者のお話……栗村　雄吉
或る蛇の獨白……瀧波　鶴藏

○詩　歌

汽車のうた（詩）……太田　準七
ユンゲ、ライデン（詩）……横尾　勇治
雜（短歌）……今田　益三
梅雨抄（短歌）……武井　勇二
青葉の頃（短歌）……大山　功
四人集（短歌）……
攝取不捨（俳句）……吉村　義朗
夏雜（俳句）……森村順一郎

○商研だより

海上保險料――研究發表報告――私法科

○丘上録

丘上短歌會――葉櫻俳莚――學生文庫――廣告研究會――神高商エスペラント協會

○筒臺日誌

○部　報

學友會各部申合せ――講演部――語學部――庭球部――野球部――陸上運動部――蹴球部――音樂部

○學校記事

○同窓會記事

濠洲だより
銀杏を植ゑる（申酉倶樂部）
在神第十二回生の會
播州在住者同窓會
故大西猪之介君を憶ふ（服部春一）
大阪凌霜午餐會記事
凌霜倶樂部
會員動靜

○編纂後記

論　壇

非ユークリッド空間の比喩的説明

佐藤　保兒

僕の屬する商研の學生諸子と相談の上半公開的に講じたる「相對性原理の數學的基礎」を本誌に載せるべくあまりに安請合したることを今御詫びします、昨年來講演部から依頼され更に自由講座から依囑されたけれども前者に對しては通俗的に述べ難き故を以て後者に對しては御希望を滿足せしむべくあまりに數學的であるの故を以て御斷りしたるもの三度御斷はりしなければなりませんやうな氣がします、稿を改むること三度に及びたれども出來る限り平易にと思へば冗長になり、簡單にと思ふと僕の所謂要點なる數學的事項は述べられません、何れにしても本誌に寄せるべくあまりに專門的であることを恐れます、今三度目の稿を書くこと十數枚にして止むなく筆を捨てます。

そこで同講演の前半の一部なる非ユークリッド幾何學の概念中の比喩第一卽ち僕の考察した比喩だけを述べさせて頂きませうか、論説にあらず思想にあらず研究にあらずさうかといつて昔噺でもない唯早計なりし僕の速答に御詫びして其責をふさぐのみです。

一

先づ以てこゝに二三の質問を出して見る。

「二點間の距離」とは何ぞや。誰も直ちに物差を以てはかることを考へるであらうけれども、己に物差をいふときはそれ以前に距離の單位なる相等しい刻みといふことを豫想するから距離といふことを定むるには何にも役に立たぬ。また「相等しい距離」とは何ぞやといへば、二本の棒についていへばその一本の棒の一端を他の棒の一端に當てそれを並べるときは他端が正に揃ふ樣になるときそれは相等しいといふのであらう、けれどもその一本の棒を動かして他の棒の側に運ぶときを考へ見よ、前の位置にありしときの長さとそろへるときの位置にある長さとが相等しいといふことを豫想してることになるからやはり相等しいといふことの定義にはならぬ、何となれば定義せんとする事柄を定義中に用ふることは循環論法的謬論であるからである。しからばその棒は剛體であるから何處へ移しても長さは變らぬ筈であるといふのであらうけれども、「剛體とは何ぞや」といへば如何やうに動かしても二點間の距離が變らぬものであるといふからこれも明かに循環論的謬論に陷つてるではないか。こゝに思ひ當ることはユークリッド幾何學における公理の一つに「圖形は其形及び大さを變ずることなく其位置のみを變ずるを得」とあり、而して「公理とは吾人の經驗によりて眞なりと認定する事實なり」とあり、果して大さを變ずることなくして圖形を移し得たる事實を經驗したる人があるであらうか。今吾人はかやうなる無理の公理や定義のいらぬ幾何學に立入るために强いてかゝる疑問を先づ以て提出したる次第である。

二

普通に所謂空間といへばユークリッドの空間である、ギリシャの書からやつてる二千年來の幾何學はこの空間における幾何學である、今吾人の考へんとするは非ユークリッドの空間であつて全く新ら

しき空間をこゝに作り出さねばならぬのである、而してその作り出したる結果から見るとその特別なる場合がユークリッドの空間になるのである。これが極めて大切なる點で、現今數學發展の一方面は斯樣なるもので、なるべく概括的にすべてのものを包含せしめ從來存在せるものをその特別の場合たらしむることにつとむるのであつて、名は非といふからとて在來の空間を全く否定して少しも緣のないものであると思つては大間違ひである。

三

先づこゝに地平面上にたとへば北の方向に一つの直線を考へそれを遙かに延長して見る無限に延長する、其の無限の先きの極點を一つとる、この點を無窮遠點といふ、今度は少し方向をかへて北東の方向に一直線をとると同樣に無窮遠點が考へられる、斯樣にすれば自分を中心としてまはり中に無窮遠點が並ぶことゝなる、それが集まつて一つの連續的なる線をなすと考へられる、即ち自分を一周する圓形の線であるこれを無窮直線といふ今度は自分を中心にして更に立體的に考て見る、上の方にも下の方にも斜上斜下あらゆる方向にかやうな點があるからそれ等の軌跡は一つの面を作ると考へられる、即ち前記無窮遠線が自分の上下をまはつて一回轉するときそれが畫く面が丁度これに相當する、無窮遠面といふ、かやうなる面にて包まれたるたとへば球などの樣なものを想像するとこれが吾人の宇宙である即ち空間である換言すればユークリッドの空間であるのである。

四

今ある一人がたとへば北の方向に向つて疾風の勢を以て走るとする、その歩幅が一歩三尺とせんか、自分の近くを走るときはその速さが極めて目立つて見えるそして歩幅も三尺宛であることがはつきりとわかる、自分を遠ざかるに從つてその走者の速さがおそく見えるそして二十丁も三十丁も先きへ行けばその歩幅が次第に小さくなり速さも次第におそく見えて中々遠ざからぬであらう、況んや二里も三里も先きの方へ行けばその人の影は殆んど一點の如く見えて歩幅などはゼロに近くなる、そして遙かに〳〵走つて十里二十里乃至百里千里一萬里百萬里と走つて行くとせば益々その人の歩幅が小さくなり影が小さくなり同時に前進せぬであらう。さりながらその人自身の立場になれば常に同じ速さ同じ歩幅の三尺で走つてるわけであらう、かくして遂に一生涯は愚か百萬年走つてもその無窮遠點に到達することはないであらう。更にまた飛行機に乘つて天空に走るときを考へんか只方向の差こそあれ事情は全く前の場合と同樣に見られるであらう。

今その球狀のものを今迄の性質と全く同じ性質を與へつゝ次第に小さくする、その球の壁は元より無窮遠面の性質があるから吾人の到達し得べからざるものである、それを更に小さくして益々小さくしてその球を吾人の眼前に持つて來る、さてこゝに見ゆる一つの球（しかし性質は前と少しもかはらぬもの）内の空間を考へて見るこれを名づけて吾人は非ユークリッドの空間といふのである。

五

そこで此空間内で動くものを外から自分が見てると、その内のものが少し動いても長さがかはり大さが變つて見えるであらう、一尺のものも少し前進すると一尺より少し短くなつて見えるであらう、その中で歩み出した第一歩を三尺の歩幅とするとその人が走るに從つて歩幅が次

第に小さくなる、又速さも初めの中は速かなりしも暫く走つて行くと次第におそくなり否自體が次第に縮小するからそれに比例して歩幅がせまくなりおそくならざるを得ない、やがてはいくら走つても殆んど前進が見られなくなる、壁に近づくに從つてその自體はゼロに近くなり遂に百萬年走つても容易に無窮遠面なる球壁に到達することは出來ぬことがはつきりと認められるであらう。

相對性原理ではある長さのものが急速度で前進すると長さが短縮して見えるといふがこの邊に關係があるのであつて、光速度に比較すべき程の速さなる電子の運動の如きものにあつてはユークリッドの空間はあまりに狹ますぎるから比較的にいへば電子に對しては空間は非ユークリッド的になるわけであらう、即ち該空間にありては前進するもの（前進とは後退といふも同義にして唯自分を中心として遠ざかるものをいふや當然なり）は縮小して見えることになるではないか。

しかしながらその中に走つてるその人自身は常に三尺の歩幅で不變なる速さで走つてるつもりであるに相違ない、知らぬ間に自分の身體が小さくなり歩幅がせまくなつてる事に少しも氣がつかぬであらう、何となれば身長なり歩幅なりと同時に物差それ自身も共に短縮して行くからである、而し壁に近づけば物差も長さも何もゼロになる但し身長に對する比率は依然として變らぬであらう、たとへば近眼鏡をかければ物が小さく見える筈であるけれども物差も同時に小さく見えるからかけてる人は少しもその小さく見えることに氣が付かぬと同理である。

六

以上は非ユークリッド空間の例である、かやうなる空間を双曲的空間といふ、この外に隋圓的空間といふのがあるその中間にユークリッドの空間があることになる。さりながらこれ等三者は全くはなれて存在してるのではない、これを數學的にいへばコングルーエント變換式の群に關する不變式なる。

$$x_1^2+x_2^2+x_3^2+x_4^2=0$$

が所謂一般なる空間を定義するものであつて解析的にいへば全然群論的基礎を有するものである。

$x_1^2 \wedge 0$ なるものは双曲的空間を定義し

$x_1^2 \vee 0$ なるものは隋圓的空間を定義し

$x_1^2 = 0$ なるものは拋物的空間を定義し

即ちユークリッドの空間を定義するのである。

而して第一者双曲的空間内に更に四次元の空間を想像して運動を論じたるものがミンコースキーの物理學的世界をなすのであつて相對性原理はこれより出發する。（完）

海洋の自由

島本　英夫

一、序　言
二、海洋自由の沿革
三、海洋自由に關する現行國際法規
四、海洋自由問題の前途

一

海洋の自由とは一言にして云はば公海は何れの國權の下にも立たず即各國は自由に之を使用するを得との國際法規を意味するものである。處が先般の戰亂に際しては、各交戰國が公海に對する自國の權利を盛に主張し實行し、例之獨逸が公海に水雷を敷設したり、所謂潛航艇戰を以て船舶の無警告襲撃を行へば英國亦屢

々海上の封鎖を行ひ其の一九一八年五月一五日より開始したる封鎖の如きは其の區域蘇格蘭より諸威一體に亘れる海面實に二萬二千方海里に及んだ樣な次第であるから其の結果、中立商業の蒙りたる有形無形の損害は極めて多大であつて、從來より一般に承認せられて居る海洋の自由なる國際法上の原則は果して今尙ほ現存するのか何うか、現存するとするならば其の性質、其の効力範圍如何と云つた樣な議論が各國殊に中立諸國の輿論家實際家間に盛に唱へらるゝに至り國際聯盟の設立に際しても其の產婆役たるウヰルソンは世界改造に關する一項目として此の問題を大に考慮したのであるが主として英國側の反對の爲に遂に聯盟規約中には此の點に付ては何等の規定をも見出すを得ざるに至つたのである。併し聯盟規約が各國の意見不一致の爲に此の海洋自由問題に言及するを得なかつた事實は又以て此の問題が各國に於て如何に重要視されて居るかを示す譯である。

二

古代及び中世紀の前半に於ては公海の航行は何人にも自由であつた。Ulpianus は此事を理由付くるに「海は自然が總ての人に開放せるが爲なり」と說明しCelsus は「海は空氣と同じく全人類に共通である」と述べて居る。然るに羅馬帝國は世界國——世界を統治する國家——であるとの觀念成立するに至つて世界の一部分たる海亦羅馬に所屬すと唱へらるゝ樣になり羅馬皇帝 Antonius Pius の如きは朕は世界の王なるが故に從て又海の王なりと詔し、羅馬滅亡後、羅馬皇帝の名を承繼したる獨逸帝國諸皇帝は他の多數の肩書と共に「太洋の王」なる稱號を用ひたのであつた。處が中世紀の後半に及んでは各國は其の主權を公海の一部に伸張し得るものと信ずるに至りヴェニス共和國はアドリヤ海に、ゼノア共和國はリグユリ海に、葡萄牙は印度洋の全部及太西洋中モロッコの南に位する部分に對し何れも其の主權を主張し西班牙は太平洋及メキシコ灣に、瑞典、丁抹はバルト海に、又英國は英吉利海峽、北海及ノース岬より フイニステレ岬迄の太西洋に對し各其の支配權ある事を主張したのである。

之等各國の海洋支配の主張は當時海洋に關する各國の利害衝突が左程大きくなかつたのと且は海賊取締の便宜よりして數百年に亘つて實現されてきたのである(註一)。卽海上主權國は(A)其の海上を航行する他國船舶をして海上國の國旗を尊敬せしむるを得(例之右海上に於て海上國の船舶と遭遇したる他國船は其の上帆を卸し其國旗を卷くを要するが如し)るの外、(B)外國船より通行稅を徵收し(C)外國人に對し漁獵を禁止し(D)更に進んでは外國船航行の制限又は禁止をも要求し得たのである。

しかし乍ら海に對する列國利害衝突の增大は此の海洋支配權を何時迄も其の儘にして置く譯がなかつた。葡萄牙及西班牙が亞米利加大陸の發見後、自己の主權を有すとする印度洋、太平洋等より他國船舶を排除せんとの過大なる要求は斯る權利の存在に對する否認者を續出せしむるに至つた。卽英、佛、和蘭の探檢家商人は葡西國の禁止に拘らず印度洋太平洋を公然航行したのである。而して有名なる英國海軍々人ドレークが太平洋航行をなしたる事に對し西班牙の大使メンドーザが一五八〇年英國女皇エリザベスに抗議をなしたる時に彼女は「各國の船舶は遠慮なく太平洋を航行するを得可し蓋し海と空氣は各人に共通にして如何なる國家も太洋に對する權利を主張するを得ないからである」と昂然として答へたのであるが(註二)、此の返答後二十九年にして海洋自由論の大愿人たる和蘭人 Hugo Grotius の名著海洋の自由 Mare Liberum 出版さるゝに至つたのである。グローチウスは右の書物に於て海は實際上之を占有する事は不能であり從て先占によつて之を自領となすを得ない。海は自然によりて各國主權より解放さるゝものであると唱へて葡萄牙の禁止に反對し和蘭人は印度と通商航海をなし得可き旨を主張したのである。

彼の海洋支配に對する攻擊は學界に非常なる反響を與へ英國及び西班牙の海洋支配論を辯護する Gentilis の Advocatis Hispanica (1613) を始めとし、英國の爲にする William Welwood, John Selden, Sir John Burough ヴェニス共和國の爲にする Paolo Salpi 等續々書物を著してグローチウスの所論に反對したのであるが其の中でも最も有名なのは、セルデンの海洋の閉鎖 Mare clausum であつて此の書物に心醉し切つた英王チャールス一世は和蘭に駐劄せる自國使節を通じてグローチウスの所論の無暴なる事を和蘭政府に抗議せしめ其の處罰を要求した程であつた。

斯の如く海洋支配論が盛であつた結果グローチウスの所論は容易に各國に承認せられさうもなかつたのであるが時勢の推移は遂に海洋航行の自由と云ふ一點を一般に認むるに至らしめ英國もヴェニスも他國の船舶が其の所謂主權下に在る海洋を航行する事に付ては異議を唱へざるに至つたのであるが、他の點に付ては尙海上主權は承認せらるゝの有樣であつた(註三)。然るに十八世紀に及んでは學者は一般に沿海と公海とを區別し前者は沿岸國の主權下に立つ可きであるが後者は何れの國にも屬せずして總ての國民に公開さる可きであると主張するに至つたのであつて(註四)、此の學者の議論と各國海軍力の增加とは公海の自由論を益々盛ならしめ流石の英國も其の國旗に對する敬禮の要求を暗默に拋棄し、一八二一年アラスカを領有し居たる露國はアラスカの沿岸を距る百哩(伊太利哩)內に他國船舶の入る事を禁じやうと企てたが英米の抗議に遭つて右要求を撤廢する事を餘儀なくされ北米合衆國がアラスカを露國より讓受けたる後、ベーリング海の海豹捕獲に關する規則を設け之によりて一部公海の管轄、支配を主張して英國との間に爭議を生じたが之も一八九三年仲裁々判の結果公海自由の論の利益に解決されたのであつて、今日に於ては學問上のみならず平時の場合に就て見るならば海洋の自由は事實上も完全に存在する次第である。

然るに地球上何れかの國家間に戰爭が起つた場合には、國際法は交戰國に海上封鎖權、戰時禁制品の沒收權、海上捕獲權等を認むる結果、敵船のみならず中立船迄が公海に於て屢々交戰國の軍艦の爲に臨檢搜索を受け或は拿捕の憂目を見る譯であつて所謂海洋の自由は戰時に於ても存在するのではあるが平時に比しては餘程制限された自由しか有たない事となるのである。殊に交戰國は互に口でこそ海洋自由の嚴守を誓つては居るものゝ(註五)、事實上は往々にして國際法の認むる以上の臨檢搜索拿捕を行ひ易く、這般の戰爭に於ても中立國からは此の點に付て常に苦情百出の狀態であつた。茲に於てか海洋の絕對的自由卽平時のみならず戰時に於ても公海使用の安全を保障する原則の確立運動の起るは當然の歸趨であつて單に學者のみならず各國の實際家中にも之に贊同する者極めて多かつたのであ

る。羅馬法王が一九一七年八月一日に發した平和通牒の中にも此の要求が表出されて居り北米合衆國が參戰前であつた一九一七年一月、ウヰルソンが上院に於てなせる演說中にも此の主張は明言されて居る。殊に一九一八年一月ウヰルソンの發表せる所謂講和條件十四ケ條の中には平時戰時を問はず公海に於ける絕對的航行の自由が高調されて居るのは世人の知る通である。處が既に述べたる如く平時に於ては海洋の自由は完全に行はれて居る次第であるからウヰルソンの此の提議は畢竟戰時に關して述べられたものと解するの外はない。卽ちウヰルソンの所謂 Absolute freedom of navigation とは現行國際法上交戰國に認めらるゝ海上封鎖權戰時禁制品の沒收權及海上捕獲權の拋棄を要求する言葉である。併し此の提議は英佛の替同を得る事が出來なかつた。英佛兩政府は此のウヰルソン大統領の用語は種々に解釋し得る所であつて或解釋に付ては替同を吝まないが或解釋に據る可きものならば之に同意し難い旨を回答し平和會議出席に就ては英佛兩國は此の問題に對し替否全く自由の立場に在る可き旨を述べたのである。

斯の如く海洋の絕對的自由に付ては英佛二國の贊成を得る能はざる事明であつたのでウヰルソンは平和會議に於て此の提議を力說せず從て又聯盟規約は此の點に付て何等定むる所なかつたのである、學者にして此の點に關し種々の意見を有する人もある樣であるが(註六)、世界の大勢を動かすには力足らずとの觀を免れ得ないので、要するに海洋自由の原則に關する國際法規は大戰前も今日も同一の狀態に在るのである。

註一、獨逸皇帝フレデリック三世が穀物をアドリア海を通じて輸送するの件に付てヴェニス共和國の許可を受けたるが如き(一四七八年)、英國が十七世紀に於て其の許可を受けずして北海に漁獵せる和蘭人を攻擊して三萬磅の賠償金を取立てたるが如き、又西班牙のフイリツプ二世がマリー女皇と結婚する爲英國に到るの途中所謂英國の海に於て之を出遭ひたる英國提督の爲に右船舶が西班牙の旗を揭揚し居たるの故を以て砲擊されたるが如き、(一五五四年)又更に丁抹王が英王ヂエームス一世を訪問しての歸途テームス沖に於て出遭ひたる英國提督の爲に丁抹の國旗を卸す可く强制されたるが如き、(一六〇六年)之等の事實は上述の諸國が何れも海洋上に主權を有するものと一般に認められて居つた證左である。

註二、但エリザベスの此の返答はガツペンハイムが(國際法三版平和篇四一〇頁脚脚)言つて居る如く自國の商業、航海の利益の爲に斯く述べたに過ぎないのであるから若し此の筆法を所謂英國所領に適用せんとする者があつたならば恐らく其の不興を買つた事であらう。

註三、一六七四年に締結せられたるウエストミンスター條約四條には和蘭は所謂英國の海に於ては其の主權を承認する彰徵として自國船舶をして英國の旗に敬意を表せしむ可き旨を約して居るが斯の如き海上主權の承認は當時一般に認められて居た事である。

註四、公海自由論を唱へた學者中にても Bynkershoek, Vattel, G.F.V. Martens, Azuni 等は其の最も名有る者であつた。

註五、這般の世界戰に際して各交戰國は何れも海洋自由の爲に戰ひつゝある旨を公言して居る例之、獨逸政府は英國の破りたる海洋自由の爲に戰ひつゝある旨を述べて居るに對し英國政府は海洋自由の原則を破りたるは獨逸にして獨逸は濫に公海に水雷を敷設し又所謂潛航艇戰によりて敵船のみならず中立船をも沈沒せしむる事等によりて海洋自由の原則を破つたと主張して居る。墺太利の外相 Czernin 伯が米國政府に宛てたる文書中にも公海の自由を高調して居る樣な有樣で各國總て海洋の自由を尊重せる事を公言して居るが彼等の所謂海洋自由の爲の努力はガーナーが其の著國際法と世界戰二卷四五八頁に於て述べて居る如く眞實の告白と云はんよりは僞善的分子を多く包含して居る事を見逃してはならぬ。

註六 ガーナー上揭四五九頁脚註の記載する所によれば A.G. Hays は海洋の自由とは戰時禁制品の廢止、商業封鎖の禁止、私有財產を海上捕獲の物體とせざる事を意味すと主張し、The American Institute of International law は一九一七年一月海事中立法典を起草し商業封鎖の禁止、戰時禁制品以外の私有財產の海上に於ける保護、商船は敵國人のものたると中立人のものたるとを問はず絕對に擊沈す可からざる事、適法なる船舶證書を具ふる中立船の臨檢を禁ず可き事等を規定し又獨逸の法學者 Meurer は商業封鎖權は最早之れを認む可きでない。此の權利は中立國及び其の商業に對する野蠻行爲を法律化したものであると叫べるが如くウヰルソンの所謂海洋の絕對的自由に共鳴せる學者は極めて多いのであるが現行國際法を變更せしむるには未だ微力たるの感を免れないのである。

三

海洋の自由とは公海(註七)より總ての國家の主權を排除すとの國際法上の規定を意味するものなる事は既に述べた通である。卽ち公海に於て領土主權を取得せんとする事は其の原始取得たると承繼取得たるとを問はず國際法は之を許さない。リストが海洋は無主物 Res nullius にあらずして共有物 Res Communis omnium であると云つて居るのは(註八)此の事を形容したのである。

公海は何れの國家にも屬せざる結果總ての國は平時は勿論、原則として戰時に於ても自國の軍艦及商船を自國々旗の下に而も自國法の下に公海を航行せしむるを得可く又公海の無限の富を自國漁獵に依りて採取するを得るのである。

今海洋の自由に關し國際法上一般に認めらるゝ點を列擧すれば大約次の通である。

(一) 各國船舶が其の國の國旗を揭揚して航行せんとする場合の許可に關し規則を設け又其の船舶には其の國の國旗使用權を證明する書類を具へしむ可き事(註九)

(二) 各國は其の許可なくして其の國の國旗を揭げて航行する他國船舶を處罰し得る事

(三) 一國の國旗を揭揚せる船舶は公海上に於ては其の乘組員及載貨と共に右揭揚國旗國の支配下に立つ事(註一〇)

(四) 海賊は其の國籍如何を問はず各國之を處罰し得る事(註一一)

(五) 沿海の漁獵は其の沿岸國に於て自國民にのみ之を留保する事が出來るが公海上の漁獵は各國船舶の自由に行ひ得る處である(註一二)、但北海の漁獵、北太平洋に於ける海豹漁獵、フエルー島及び氷州附近の漁獵に於けるが如く各國が條約を締結して一定の公海に於ける漁獵を制限し得ぬ處である

(六) 公海に於ける電信電話線の敷設は各國の自由である。今日多數に敷設されて居る海底電線の保護に付ては一八八四年巴里に於て調印を了したる海底電線保護協約と云ふものがあつて英米獨佛其の他多數國家之に加入し我國亦後に至り之に加はつたのである(註一三)。

尙公海と相關連する公空と公海下の土地の法律上の性質に就ては一般に次の如く認められて居る、卽ち

(七) 公空——公海上の空中は公海と等しく各國の自由に使用し得る處である(註一四)

(八) 反之公海の海底下に位する土地は先占の物體となる卽ち各國は海洋の自由を妨げざる限り沿海の下の土地より坑道を穿つ等の方法によりて海底下の土地を先占し以て其の地中に存在する鑛物を採取し得るのである。

以上は專ら平時に就て述べたのであるが要するに平時に於ては海賊行爲をなすとか奴隷貿買を行ふとか或は他國の所有海沿海にて犯罪行爲を行ひ脫走したと云ふ樣な場合でない限り各國の船舶は自國の法律の下に自由に公海を航行し又其の富源を開拓し得るのである。卽ち海洋の自由は平時に於ては完全に實現されて居るのである。

然るに戰時に際しては交戰國は爰にも述べた如く海上封鎖、戰時禁制品の沒收船舶の捕獲等の諸權利を取得する結果所

謂海洋の自由は非常なる制限を受くる事となるのである卽ち

(一) 交戰國は敵の港灣沿岸を海軍力を以て封鎖し其の地と海上よりする一切の交通を遮斷する權利を有し其の敵地より出航すると外海より之に入るとを問はず封鎖を破りたる船舶は拿捕沒收せらるゝに至る。此の場合の載貨の處分に就ては從來議論の存する所ではあるが一九〇九年の所謂倫敦宣言及我が海戰法規は載貨も沒收せらるゝを原則とし荷積人に於て載貨積込の當時該船舶に封鎖侵破の意思あるを知らず若くは知るを得ざりし場合に限り之を免除するものとして居る

(二) 交戰國は戰時禁制品として自國より中立國に通告したる貨物を中立船が敵國に輸送せるを發見した場合には其の船舶及び載貨を沒收する事が出來る。又交戰國は敵の軍人軍隊を輸送し若くは敵の爲に報告を傳達する目的を以て航海する中立船舶に就ても同樣の處斷に出づる事が出來る

(三) 敵の公有船のみならず私有船と雖も其の載貨と共に捕獲權の物體となる。但し俘虜交換の爲又は休戰の交渉の爲にする船舶、學術宗敎又は博愛の任務を帶ぶる船舶、軍用病院船及び沿岸漁業船は之れを破壞拿捕するを得ない事と定まつて居る。卽ち

總ての敵國船は其の公船たると私船たるとを問はず公海に於て海上捕獲權の物體となるのみならず中立船舶にても戰時禁制品の輸送其の他の中立違反行爲若くは封鎖侵破行爲の有無調査の爲め交戰國軍艦により臨檢搜索を受け此の臨檢搜索に抵抗したる時又は中立違反行爲封鎖侵破の確定したる時は拿捕沒收の災難に遭ふ譯であつて要するに現行國際法上は海洋の自由は戰時に於て大なる制限を受くる次第である。

註七、公海とは海の中より所有海と陸海とを除いた部分であるが太洋卽ち太西洋太平洋印度洋北極洋南極洋の外之れ等太洋のブランチたる北海英吉利海峽愛蘭海バルト海カラ海白海地中海リゲユリ海テイルヘニ海アドリア海イオニヤ海マルモラ海黑海モザムビク海紅海アラビア海紅海支那海東海黃海オコツク海ベーリング海カリベ海公海に屬するは勿論ボスニア灣フインランド灣ゲイニア灣ベンガル灣シヤム灣トンキン灣メキシコ灣等亦此の中に入る可きものと解せられて居る。

註八、リスト國際公法十一版一八四頁。

註九、如何なる船舶に自國々旗揭揚權を認むるやは全く各國に內法の定め得る所であつて之が爲に例之英國獨逸等は自國人のみの所有する船舶又は自國に設立せらるゝ法人の所有船に對してのみ之を許可せるに反しアルゼンチンは他國人の所有船にも之れを認めて居り佛蘭西の如きも佛國人が持分を有する船舶には之れを許せるを見るのである。

註一〇、但海賊、奴隸賣買の嫌疑ある船舶は其の揭揚國旗如何を問はず公海に於て各國軍艦により臨檢搜索せられ又他國の所有海港にて其の國の法律を犯し脫走したる船舶は其の港泊國軍艦の爲に追躡せられ公海に於て拿捕せられても敢て怪まないのである。

註一一、海賊行爲とは公海に於て私船の乘組員により他船又は人又は物に對する暴行を云ふと定義する事が出來る、モロッコ、アルジヤー、テユニス、トリポリ等地中海諸國に於ては昔て海賊を公認して地中海に於て盛に他國の通商を妨害せしめた事があるが今日にても私的海賊は紅海殊に支那海に出沒して通商を妨げて居る。

註一二、沿海とは公海との境界とを那邊に求むるかに就ては今日未だ定說を見る事が出來ない、唯海岸より三海里以內が沿海たる事に就ては一般に異議のない所である。

註一三、無線電線に就ては一九一二年國際無線電信協約なるものを成立し我が國其の他三十箇國之れに加入して居る。

註一四、一九一九年十月十三日巴里に於て締結せられたる航空條約は各國が其の版圖上の空間に完全且つ排他的に其の主權を行使し得可き事を定めて居るが其の反對解釋によりても所謂公空の自由を推定し得ると信ずる。

四

抑も海洋の自由卽ち公海の自由を何故に認む可きやに付てはグローチウス以來

次の二理由が主張されて居る。

(一) 海洋を海軍力によりて占有する事は事實不能である故に公海は何れの國の支配下にも屬さない。

(二) 海洋の如く凡ての者が他を害せずして無限に使用するを得る、換言すれば各人に滿足を與へ得可き事物を獨占するが如きは自然が何人にも許さない所である。

併し乍ら第一の理由は各國艦船の數、量、質等が甚だしく進步增加せる今日從て公海と雖事實上占有し得ずとは限らない今日に於ては最早其根據を失つたものと見なければならず又第二の理由は自然法論者の影を潛めて現代に於ては餘り重きを置かれさうもないのである。公海自由の眞實なる理由は右二點には存せずして海洋により分離せしめらるゝ各國間の交通の自由就中商業自由の爲なりと云はねばならぬ。海は遠隔の諸國を連絡せしむる公道である。此公道を一ケ國の支配下に立たしむる事は不合理であるとの各國共同の確信が此海洋自由の原則を國際法規として成立せしむるに至つたのである。處が平時に於ける海洋の自由は現實に行はれて居る所であるからして海洋の自由と云ふ問題に付て今日一言す可き點は唯戰時に於ける海洋自由の問題である而して戰時に於ける海洋の自由を妨ぐるものは國際法上交戰國に認めらるゝ封鎖權、禁制品沒收權、捕獲權である以上、戰時海洋自由論は自ら此三權の廢止若くは制限と云ふ事に歸着せざるを得ない(註一五)

併し乍ら果して之れ等の權利の廢止若くは制限は實現され得るであらうか。

先づ封鎖に付て見るに海戰に於ける封鎖は陸戰に於ける包圍に該當するものであつてバルフオアが此問題に付て海軍力にのみ制限を加へて陸軍力を其の儘にし置かんとするは蓋し國際法が人類に加へ得可き最大の侵害であると述べて居るのは確に一面の眞理を包含してゐると見なければなるまい。包圍が陸軍國に缺く可からざる權利ならば封鎖亦海軍國に取りて除く可からざる交戰中段である、若し封鎖を否認せんとするならば包圍に付ても同一の態度に出づるの必要がある。成程封鎖は海洋の自由を害し中立商業に甚大の不利益を蒙らしむるのではあるが之は戰爭なる制度が認めらるゝ結果生ずる所であつて又避くるを得ない所である學者中或は封鎖線を破るを得ざらしむるは敵船のみに限る可きである。第三國の船舶は自由に封鎖線を出入せしむ可きであると主張する者もある樣であるが新の如くんば多くの場合に於て對封鎖國は第三國の船舶によりて自由に外國と交通し必要なる物質を輸入するを得る事となつて封鎖は事實上無意義となる虞がある。

次に禁制品の沒收に付て考ふるに之が廢止と云ふ事は交戰國をして容易に軍需材料を中立國より求むるを得せしめ徒に戰爭を長引かしむるのみならず中立國をして事實上戰爭の禍中に投ぜしめ交戰國の範圍を擴大するに至るの虞あるのみならず英國の如く海軍力を以て始めて其の安固を維持し得る國家は容易に此事に贊成するを肯せないのである。唯倫敦宣言に於けるが如く禁制品の範圍を條約を以て一定し禁制品と然らざるものとを區別する事は可能ではあるが國情を異にし從て又禁制品の選擇に付て意見を異にす可き各國に通じて禁制品を一定するは無意義たるの非難を免れ得ない。

最後に海上捕獲に付て見るに之が絕對的禁止は到底實現さるゝの餘地がないであらう蓋し戰爭は他方を屈服せしむる事

を目的となすものなる以上直接間接敵の武力を構成する敵船敵貨の破壞拿捕は、苟も戰爭なる制度が認めらるゝ限り已むを得ざる所であつて此の權利を認むるにあらずんば海戰は實際上之を行ふを得ざる事となるからである。但戰爭は國家對國家の關係であつて國民對國民の戰にあらずとのルーソーの主張は今日一般に承認せらるゝ所である以上戰爭の爲に敵國人の私有財産に影響を及ぼす可らず卽敵の私船及び其の載貨は之を拿捕沒收す可からざる旨の條約各國間に締結され、從て又斯る條約に淵源する國際法規が將來に於て成立する蓋然數は頗る大であるが（註一六）、敵の公船及び其の載貨の破壞拿捕は依然行はるゝの外ないのである。

Walter Schücking 及び Hans Wehberg 兩博士の共著になる國際聯盟規約は其の八六頁に於て有效なる海洋の自由は國際團體從て又國際聯盟が海上權を掌握するに依りて保障され而も右海上權は各國の海軍力を消滅せしめ國際警備艦隊を組織するに依りて實現さる可きであると述べて居る。各國の海軍力の消滅は當然各國をして他國の船舶の臨檢搜索拿捕を行ふ能はざらしむるものなる以上本說は正當には相違ないのであるが而も今日の國際關係に於ては畢竟實現する能はざる一のユートピアである事は何人も直に首肯し得る所である Charles Stewart Davison, The Freedom of the seas は其の三四頁に於て平時に於ける海洋の自由が今日及び今日迄完全に行はれ又行はれたる事は何人も認むる所である然れども戰爭なるものが存在する限り戰時に於ける完全なる海洋の自由は存し得ずと云ふ事も亦世人の認むる所であらうと述べて居るが私は結局此の說に贊成せざるを得ないのである。海洋の自由は戰爭なき場合に於てのみ完全に實現され又將來も實現されるであらうが一度戰爭が開始さるゝに至りては其の何國間の戰爭たるとを問はず海洋の自由は交戰國の封鎖權禁制品沒收權及び捕獲權の爲に制限を免るゝ事は出來ないである。ウキルソンの所謂平時戰時を通じての海洋の絕對的自由は到底近き將來に於て實現の見込はない。

註一五、リスト上掲一八五頁及び三六八頁參照。

註一六、現に一八六五年伊太利は其の海上法二一一條に於て敵商船に戰時禁制品を輸送せず又封鎖を破らざる限り之を拿捕せざる旨を相互主義の下に定め又一八六六年普墺兩國は其の開戰に當り互に敵の商船を拿捕せざる旨を明言し、一八七〇年普佛戰爭に際しても普國は佛商船は之を拿捕せざる旨を宣言し（但佛國が同一態度に出でなかつた爲に普國は後に其態度を改むるに至つた）第一第二の海牙平和會議に於ても北米合衆國は海上に於ける敵商船及び其載貨を捕獲す可らざる旨の規約の成立に努力したのであつて（英國の反對の爲に不成立に了つたが）將來必ずや敵國人の私有財産は完全に保護さるゝ時期が來るものと思はれる。

規範會計學の發端

矢部利茂

一

會計學 The Science of Accounting は本井教授に從へば一會計實體內に於ける會計狀態の研究をなす科學にして（註一）其の淵源は遠くこれを簿記法に置くものなり。（註二）惟ふに伊太利簿記法の始祖ルーカスパチオリ以來四百五十年會計に關する組織的研究は久しく簿記法なる狹き範圍に限られるたるも十九世紀以來商工經營の上に著しき變革を來しその財政狀態整理の問題益〻困難となるに及び從來の單純なる簿記論に依存するを得ずしてこれを技術以上のものに求め茲に一科學を得て（註三）會計學と命せり（註四）。

（註一）平井教授高商創立記念講演

（註二）下野直太郎著計算學二頁參照

（註三）會計第一卷第三號二四頁見松氏會計學と簿記學參照

（註四）Accounting の譯語につきては本邦學者區々として一定せず會計學となす外或は計算學と云ひ或は計理學と云ふ、從つてその含む所の範圍一定せず簿記と理論となすものあり又 Accounting の一部なりとなすものあるも總て穩當ならずこの點につきては曾て商大鹿野教授と明大中村教授との間に數回に亘りて激烈なる論爭ありたり（國民經濟雜誌第二十一卷參照）

然れどもその得たるもの果して最初求めたるものそのものなりしか、若し然らずとするも正當且つ獨立せる科學としての誇を有し得たりしや。

さはれ永年の慈深き母の膝を去り、眞の世界を尋ねて獨立の途に志したる會計學は齡若き學の常として凡ゆる惱より免るゝを得ざりき。卽ちその係はる所時には法律學と曰ひ、時には經濟學と曰ひ、未だ一の定まりたる認識目的を有することなく、徒に末にのみ走り、或は記帳法の改善を叫ひ或は商法上の貸借用語の說明を叫ぶ。然も嘗て學としての反省の立場に自らを置く遑をすら有せざりしなり。

茲に於てかその極まる所遂に福田博士をして「簿記書なるものは幼童の使用に供するを以て目的として論述せられ學術的基礎を有するもの甚だ稀なり、余は常に彼の簿記學者の說くが如き淺薄なる質借の說明を以て到底滿足し能はざるもの」と叫ばしめ（註一）故大西教授をして「商業學は學に志してより日尙ほ淺く千種萬態の智識を無批判に借用したる學問上の債務國であつて、認識論の依て以て出發すべき最小限度の認識をすら所有せざるが故である」と嘆せしめたるなり。（註二）

（註一）福田德三著、經濟學研究七六九頁

（註二）大西猪之助著、因はれたる經濟學三三六頁

然れども如上を以て世の會計學者中未だ全く此の點を顧慮せずと云ふに非ず、例へば、會計學者 Bentley 氏は曰く「會計の原則及び意義は實際及び技術とは明瞭にこれを區別すべきものなり、此の原理の重要なるは如何にこれを過重視するも尙足らざるべく其の徹底的研究は實際家にとりて必須の要件なり」と。（註一）又同じく此點に就き Sprague 氏その著に述べて「數學的可分的科學の一分派として の會計學の原理は先天的惟理に A priori reasoning よりて決定せらるゝを要し斷じて技術を圍繞する習慣傳統等に依るべからず」となし（註二）我國に於ても中村教授はその論ずる所は如何にともあれ、先に「會計學上の諸基礎概念を劃期にせよ」と號し斯界に警鐘を亂打せるを見るなり。（註三）

（註一）Bentley—"The Science of Account" preface P1. 彼は更に言を續けて曰く "Their through mastery is essential to the practitioner, Without them, correct practice is impossible save in a limited and parrot-like way. With them, a correct and effective practice is possible under every divergent requirement of the art"

（註二）Sprague—"The Phieosophy of Accounts" Preface P2.

（註三）會計第一卷第三號七二頁

二

凡そ科學的研究を分ちて二とす、卽一は純學理的研究にして他は實踐的研究換言すれば純粹なる科學とその應用たる實際的解決の法則と是なり、前者は認識を目的となし後者は人生の目的に適合せんがために人間の能力に依りて如何に事物を形成すべきかを敎ゆ。（註一）然れども之は實踐的科學は必ずしも理論を實地に應用する方法論に止まるの謂に非ずして實際問題の解決に必要なる學問的原則の研究なりとなすべし。（註二）

（註一）　パウルゼン著、倫理學蟹江譯二頁
（註二）　哲學大辭書參照

然らば學としての會計學は上述の中、何れに屬すべきや、抑會計學の研究の對象は一會計單位（註一）に於ける會計價値及びその要素の配合狀態なり。而してその會計價値とは余の考ふる所によれば會計單位の所屬する經營生體に於て經營の目的を達するために有用なりとせらるゝ度合を意味し通常財として具象せられ、（註二）貨幣價値を以て客觀的に表彰さるゝものなり。從て、各個別的なる財を橫斷的靜態の下に置き、その會計價値を見出す場合に於て一見恰も純理的數學的なる科學なるが如く見ゆるも實は決して然らず、（註三）蓋し、會計價値は貸借對照表の內容を構成するものに係はる主觀的相對的價値判斷にして貸借對照表の眞實性は此の意味に於て相對的觀念を以てのみ解し得るに過ぎず。（註四）且つ會計學の職分とする所は現に實在せる個々の財の會計的評價及び財政記錄をなすに止まらずその重大なる任務は卽その評價を會計單位に卽せしめ現實を立場として會計經營の目的卽至當なる會計狀態を想定しかゝる至當の狀態に到達するの手段を論定することこれなり。例之時價の騰貴に依る利益の配當如何の問題に於て、時價の騰貴による貨幣價値の增加は果して會計上利益なりやの問題は前者の場合に屬し、その得たる評價價値を如何に處分せんかは後者の場合に屬するが如し。而して此場合現實を立場として幾種かの會計狀態は豫想せられ、その各狀態に於ける價値は比較判斷せられ最後に至當なりとせられたるものゝ一が撰擇せられかくしてその到達手段の考察はなさるゝべし。卽此の意味に於て、會計學はSeinより導かれてSollenを求め、得たるSollenは飛躍してSeinを統純するの學と云ふことを得此の故を以て余は會計學はMüssen必爲の學に非ずしてSollen當爲の學なりとし、これを解釋的科學Explicative Scienceに對する規範的科學Normative Scienceに屬せしめ、（註五）以て規範的會計學と名せんと欲す、然れども會計評價に於て會計規範の主觀性は存し會計價値自體に於て普遍妥當的なる客觀性は存す、而して貸借對照表は纔に兩者の飛躍を示すに過ぎず。客觀を得んとして主觀に復歸せるものなることに注意すべし。

（註一）　會計第十一卷第一號九三頁參照
（註二）　こゝに財とは有形たると無形たるとを問はず又積極的財產なると消極的財產なるとを問はず苟も取引の客體となり得るもの總てを總稱す。
（註三）　Dicksee 氏は新著 The Fundamentals of Accasuounty に於てそれを攻擊せり一頁、卽ち曰く It is very essential that the Student should realise from the outset that the figures are paat of the method, rather than part of the principle of accounting, and that from time totime it may be very necessary to revise the figures in order that they may indicate wiih reasonable fairneas the ideas that they are intended to convey.
（註四）　國松豐著「貸借對照表」五二頁
（註五）　ジムメルの說によればたとへ規範學なりとも學なる以上は歷史的發展を歸納的に論ずる外なければ解釋學と異なる所なしと云ひ、テーロアによれば一切の法則は應用せられて規範となるものなれば諸學總て規範學なりとなすもこは何れも既存の事實より法則を見出すとの假定に立つものにて一般に純主觀の要求として經驗以上のある要素を認むるものゝ如し、但こは主意主知兩哲學の分るゝ點にして吾人の直接に關與し得ざる所なり。

然らば卽規範科學としての本來の性質上その目的とする所は單に貸借對照表の記述的說明或は技術とは異なり更に步を進めて該表を構成する內容の本質價値を究めこれ如何に配合せばより高き會計價値を發生せしむるを得るやを知ることに存せざるべからず、故にこの決論よりすれば會計學は明瞭に實踐科學の一分派と

して承認さるべきものとなるべし、（註一）而して純理の立場のみに立てば本來價値檢討の會計學には經濟學法律學乃至その他の諸學の絕對に入るの餘地なからしむるものなるも、其實踐的研究——數的金錢的貨幣的評價配合——なる所以は時當に應じて便宜他の關係學に負はざるべからざるは會計學夫れ自身の矛盾に非ずして寧ろ當然の歸結なりとなすべし。（註二）而して唯戒むる點はこれら諸學に因はれざる超越的なる會計規範の適用是のみ、徒に實際を排するに非ず、寧ろ會計學の原理原則は事實に基きたるものならざるべからずも唯歷史統計經驗等の適用はこの規範を措きて意味なしと云ふのみ。而して恩師原口教授の會計純理と會計政策と區別し經濟學法律學の係はる所は後者にのみ存すと云はれしは、這般の消息を語るものに非るか。（註三）

（註一）　本文第二項初めに參照されたし
（註二）　會計學論叢第一集蒲生教授論文參照
（註三）　本校會計經營研究會に於て

三

夫れ會計學の研究の對象は多く實業界のことに屬し、時にその內容を異にし、時にその形式を變じ常に流轉して極まるべしとも見えず、然り而して、そが價値評價と規範の準則は介するに金錢的貨幣的數値を以てせざるべからず、主觀的にして相對的なる價値判斷はかくして客觀的絕對的なる表彰を强ひられ若き學としての會計學は圍繞し迫る凡ゆる事象（取引）に嚴然自ら持するの力を失ひ、あはれ滔々流れ込む諸學の蹂躪に委せ畢んぬ宜なる哉論者或はこれを評して會計學は行き詰れりと云ふ。

飜つて世の會計學者を見るに如何彼等の云ふ所を聞けばひたすら說く所のものは、曰く不正豫防匡正法曰く信用收攬の法曰く經營堅實主義なりと。吁然も現計記錄に所依を供し之あつて初めて豫算經營及び現計の監査批評に典則を供すべき標準原則を示すものなること（註一）に幾人留意せしぞ。此の如く學的良心の乏しきは何が故ぞ。卽曰く彼等は囚はれたればなり。これを詳言すれば會計學を說明的科學とし、或は、手段技術と見るが故なり。

（註一）　會計第六卷第四號二—五頁參照

然らば斷然茲に起つて情氣滿々たる會計學界に一服の刺戟濟を投ずるものは何ぞや、余は、滿腔の確信と熱誠とを以て答へて曰はん。規範科學としての會計學是なりと。而して斯學の依つて以て出發すべきものは、既に業に傳統的因習に非ず、法律的抑制に非ず將更に商業的特徵としての妥協乃至無關心にも非ず、卽ちそこには不斷の光明を放てる先天的惟理A priori reasonidg これあるのみ。結ぶに當り再び學界に問はん。若し資本制經濟組織の下を去りて共產制經濟組織の下に走らば從來の會計概念を以てして學としての存在果して可能なりやと。

コール氏ナショナルギルド論の梗概

近藤　備

この一文は他の研究生諸君と共に讀んで居る G. D. H. Cole氏の有名な著書Self-Government in Industry の中の第二章 National Guild 論を抄譯し且つ之れに幾何の敷衍を試みたものである。幸に一讀して戴く事が出來れば望外の仕合せです。

すべて革命を成就せしめやうとする爲には、そこに建設的理想主義が無ければならない。それが總ての大暴動の原動力であると同時に、其の反動に對する城壁となる。それ故に若し Trade Unionism（勞働組合）が將來の革命的勢力とならんとするならば、唯其の組合

を鼓舞する所の理想主義によるの外は無い。從つて勞働組合が單に物質主義にのみ踏み止つて居る間は、資本制度をして一層良い或物に變へる事の出來る機會は全く無い。

過去に於ける勞働組合は歴史的條件の維持、又は改善の目的の爲めに作られた賃銀取得者の繼續的の結合に過ぎなかつた。即ち歴史的に見れば、組合の第一の職能は、資本制度内に於ける勞働商品の價格を維持する事であつたが、十八世紀の由來、英國産業不安以後漸次組合員が新理想主義を理解する樣になり、半ば無意識的に、工場内に於ける專制に對する反抗が起り、そして勞働者は彼等自身、彼等自身の産業の主人となるまでは、奴隷的服從を免る〻事は出來ない事を自覺し始めた。從つてかゝる思想を抱ける彼等は假令公平な所得の分配が保證されても、尚彼等の自由の得られない所の、産業國營に對して反對するのは當然の事である。かくして、彼等は Collectivism 集産主義を官僚的資本主義であるとして其の綱領とする産業の國營に對して絶對に反對する。

抑々現今の社會に於ての國家は、私有財産保護の爲めに存在する强制的勢力であり資本主義の味方であり世界の經濟的階級的組織を反影して壓制的機關である以外に何等の職能をも持つものでない。又今日の勞働組合は單に勞銀取得者の組合であつて、絶えず勞働者の奴隷的狀態をより良くしやうと努力してゐる。

然らば此の資本主義の國家と賃銀取得者の勞働組合とから、ギルド社會主義者は、將來の社會の如何なる幻影を作り畫す事が出來るだらうか。

それは互に相反する兩極端の立場にある所の Syndicalism 集産主義と國營主義との混合から生れた Guild Socialism である。ギルド社會主義者の主張は、消費者組織の代表者としての國家と、生産者組織の代表者としての勞働組合又は産業別組合から造らるゝ所の團體との間に職能の分配を行はんとするのである。是等の團體を彼等はナショナルギルドと云ひ、其の主張者は自ら稱して、ナショナルギルドマンといふ。而して彼等が望む所は生産が各産業に於ける全勞働者の民主的結合によつて組織立てられ、而かも其の各結合が更に結びつきて全産業に於ける全勞働者を代表する所の團體となる如き社會である。他方に於て國家と地方自治團體の民主化及び生産者消費者間の産業支配權の分擘を期待してゐる。約言せば、國家は生産の手段を所有し、ギルドは生産の活動を支配し管理すべきである。何となればギルドマンは責任と自治とに對する生産者の要求を充すと同時に、國民所得の公平なる分配に對し消費者が當然必要とする所の財貨及び勞働の充分なる準備に對する消費者の正當な要求を、充足せしめなければならぬから。

又コール氏は現今社會に於ける根本的弊害として、勞働奴隷制度を擧げ之れを以て基準廢止せなければならぬものとして居る。彼は曰く、

多くの識者、社會主義者は勞働者の奴隷制度と貧困とを取違へて、貧困を廢絶せしめさへすれば此の奴隷制度の弊害は除かれると論じ、資國の懸隔を慈善事業によつて緩漫せしめよと云ふ意見さへも抱くものがある。然し貧困は一の徵候にすぎない貧困なるが故に奴隷扱ひにされるのではなくして、奴隷とされてゐるから貧困なのである。其の境遇が彼等を隨落せしむるのである貧困が根本的の禍源であるといふ思想に驅られて、社會主義者は所得を分配し直す事によつて社會の不幸を除かうとしたけれども何等の成功を見ないのが、貧富の懸隔は益々甚だしくなつた。兎に角社會問題が單に分配の問題であると考へられてゐる間は其の懸隔を少くする事は決して出來ない。

そこでギルドマンは是等勞働者階級の奴隷狀態からの眞の解放は、資本主義の中樞をなして居る所の賃銀制度を撤廢するにあると信ずる。それが爲には賃銀制度の根本的本質である勞働を商品として賣渡す事、從つて勞働から生ずる餘剩價値の獲得を資本主の意に任せ生産の經營權を資本主に獨占せしめないやうにしなければならぬ。さうすれば賃銀制度の從屬物である。地代、利子、利潤は自ら消滅の運命にある。

此の目的の爲には、勞働者が自分で働主となるの外は無い換言すれば勞働者自身が全體社會利益の爲めに産業を經營し組織しやうとするのである。即ち勞働組合が生産の支配權を握れば賃銀の廢止は自然に行はれるであらう。然しそれ丈では生産者專制に陷る恐れがある。

そこで生産者の代表者たる勞働組合に對立する消費者の利害代表機關が必要となる。ギルドマンは國家をしてすべての生産資料を所有せしめ、眞の管理經營は勞働者組合に委かさうとするのである。

集産主義の陷る弊害はギルドが國家に對抗する事によつて防ぎ、サンヂカリズムの有する弊害は國家がギルドに對抗する事によつて防ぐ事が出來る。即ちギルド社會主義者は生産者の利害と消費者の利害を共に尊重して生産者の團結であるギルドと、消費者の團結である國家との勢力の均衡を計り、社會に於ける調和を見出さうとするのである。然し今日の勞働組合は到底ギルドマンが要求するやうな生産經營の任に堪ゆる事が出來ない。是非共一産業に從事する勞働者全體を一組合に包含せしめて一つのギルドを作らなければならぬ(註)こゝに勞働者全體といふのは、廣義の勞働者即

ち支配人から小使に至るまでの總てのものを含むのである。現在の勞働組合はナショナルギルド建設の第一歩として、かくの如きギルドの成立に向つて努力をせねばならぬ。

最後に氏は次の如く結論して居る。

勞働者は産業界に於て自由且つ自治でなければならぬ。然らざれば解放に對する彼等の努力は虚無である。若し吾人がサンヂカリズムと集産主義の中何れか一方を擇ばなければならぬならば、假令危險を含んで居るにしても、前者を擇ばなければならぬ。何となれば、サンヂカリズムは生産を實際に實行し得るといふ保證は出來ないが、全體の人の利益を目的としてゐるから。前者は高尚なる精神を有する人の疾病である。後者は良心を持つてゐる實業家の厚顏な夢である。

勞働組合からギルドは起るべきであつて、其のギルドの中にのみ勞働者の自由があり。産業主義の暴利に對する解放は得られるのである。(完)

「博士(マヂ)の贈物」(O. Henry)の後で

何と云ふあはれ、且、甘い物語ぞ。まことや、新しきデカメロンの名に背かない數々のフイルムは氣の利いた此の一卷「四百萬」に展げられるのだ。さて、

美はしい髪の毛は心やさしき妻から惜氣もなく市に賣られ、夫の秘藏の時計の爲めの鎖と代へられた。貧しくも心たへなる妻の心はどんなにうれしく燃えたであらう。されどされど、哀れな夫、やつと二十のやさしい夫は物もあらうに、同じクリスマス、イヴに妻への爲、その黄金なす髪の爲に麗はしき櫛を買つた。而も、而も、そして又物もあらうに、愛藏の金時計を金に代へて。

みんな、みんな、一つの事、そのむかし三人の博士たちの考へもなく發明したクリスマスプレゼントの爲に。寂しくあはれな、はて、おかしき物語。(潤)

シエリーの經濟生活

内多 精一

七月八日はシエリーの百年忌です。何かシエリーのことを書けとのことですが、最近には「シエリーの面影」と題した小著を公けにし、且つ毎週講演部の方で「シエリーの百年忌を記念して」といふ題で、人としてのシエリーのお話をして居ますが、限りある僅かな頁數に、この詩人の全貌をまとめることは、非常に六つかしいことです。私は Powys 氏の Visions and Revisions の中にあるシエリー論を幾度も讀んで見ましたが、詩人のシエリーの本領を巧みに握んで而かも心憎い程氣のきいた文で批評した手際に感心したのでした。それも一通りシエリーを心得たものには興味を唆ぶのですが、さなくは讀後の印象は薄としたものでせう。そんなわけですから、私は只シエリーの一面だけを簡單に書いて見ることに致しませう。

文久二年の春まだ淺き頃であつたと記憶する。松平春嶽侯は郊外に節を曳いて、野にも山にも動き初めた春意を賞でたの

であつた。近侍の者が、あれこそ曙覽の住居で御座りますと指さすまゝに、見る影もないそのあばらやを訪づれた。曙覽のくらし振りは、貧しさの極みであつた。いつぞや調味の鹽が無くなつたので、妻はその精精げてゐた米の糠を挽へたこともあつた。されば、かうした卑しい歌よみの家に、假そめにも一場のあるじが立寄るといふことは、異數といはうか、破格といはうか、そこには興味淺からぬ劇的の場面が展開されたのである。春嶽侯は、茶色に爛れた疊から、怪しい臭が膝のあたりに這上つて來るやうに考へた草屋の中のむさ苦しさを、今更のやうに驚き眺めながらも、曙覽のからだからは御光が射すやうに思はれた。彼の人格學問藝術を考へ、鄙人の手に成長して、何の不自由もなくきらびやかな殿中に起伏しする我が身の上を顧みては、つゆたい汗の脊筋に流れるのが感じられた。これは春嶽侯が自ら記した所である。物質的に貧しい曙覽は、精神的に富めるものであつた。所有慾の極度に少い、この詩人の創造的生活の尊嚴と幸福とを理解し得た彼は、流石に英主であつた。

芭蕉も亦たこの上もない貧乏であつた

彼は無慾恬淡、風月を友として、旅から旅へと放浪し、遂には旅に病んで死んだ。彼が大阪御堂前の花屋某方に病みついた時そこに集つた弟子共が、師の病重く、復た起つことの六つかしいのを覺つて、恐る〳〵辭世の句を所望した。その時芭蕉がきのふの發句はけふの辭世、けふの發句はあすの辭世、日頃讀捨てし句一として辭世ならぬはないと答へたことは、彼の藝術に對する態度が、頗る眞面目な、又嚴肅なものであつたことを示して居る。詩や歌は作るものではない、魂から產れるものである。題を與へられて指を折つて作つた詩や歌に、何の生命があらう。日頃利息の計算をする頭に、何んで詩想が宿らうぞ、詩歌は全人格の表現である。創造者の血が流れる分身である。

シエリーも詩歌を決して遊戯と考へなかつた。彼にはそれが宗教の聲である。久遠の眞理に感應して、人間の鈍き耳に諧調を齎らす樂器である。彼はいふ『詩歌とは永久の眞理に表現せられた人生の眞の姿である』と。されば詩人としての貴き使命を自覺し、詩歌に自己の全精神を傾け盡したのである。

シエリーが無神論を唱へて、オクスフオードを放逐されたのは、彼が十九の春であつた。（一八一一年）この時は流石の彼も途方に暮れた。彼は取敢へずロンドンに出て、ポーランド街に下宿をしたが、父のティモシーは一方ならず憤つて、送金を斷つて終つたのであつた。この時シエリーの母方の伯父ピルフォード大佐は、豫ねてからこの甥を愛して居たが、元來ネルソンの部下として、又たアヂャックス號の艦長として、トラファルガーの海戰に參加した人で、さうして甥の異端邪說に驚いたわけでもなく寧ろ好意を以て父との間を和げるやうに盡力したし、又た一方には、ノーフォーク公の調停によつて、その年の五月中旬に、シエリーは年額二百磅の送金を受けることゝなり、居所及び友人選擇の自由を與へられた。思ひもよらぬ大金を貰らふことになつたシエリーは、友人ホッグに次ぎのやうな手紙を書いた。

『それは私の要求以上であるのみならず、金が私に取つて何になりませう。縱令私が流行の着物を十分に買へなくとも、何の差支へがありませう。私はまだ見すぼらしい外套を持つてゐます。私を善く解して幸福にして下さる方々が、貧乏の爲に何にかかうしたことをしてゐても、決してそれが爲めに、善くも惡くも私を考へて下さらないでせう。一箇年に五十磅もあれば十分です』。

彼は伯父に心から感謝した。

彼がその夏ハリエットを伴うてエディンバラへ驅落ちをした時に、旅費や結婚の雜用に、從兄の父メドウインから、二十五磅の金を融通して貰つたが、落着く先きで、小さいながらも一家を構へるには、勿論持合はせの金額では不足であつた。眞夜中にヨークで馬車馬を代へる間に、ホッグに急いで一筆認めた。『今夜は馬車の中で過ごします。ハリエットは私と一緒です。日曜には七十五磅を手に入れることになつて居ますが、それまでに十磅送つて貰へないでせうか。』九月一日（一八一一年）は日曜であつた。彼は二百磅を年四回に受取ることになつてゐたが二十五磅だけ餘分に計算してあるのは、どういふあてがあつたのか不明である。併し九月一日を過ぎても、父から來る筈の五十磅は遂に來なかつた。父はこの結婚のことを聞いて、怒氣心頭に徹し、再び送金を中止した計りでなく、何も知らずに金を貸したメドウインにその餘憤を漏

らし、なほその當時ヨークに居たホッグが定めしシエリーと謀し合せて、面會したものと想像し、ホッグの父へも小言を並べた手紙を出したのである。父は息子を窮地に陷れて、やがて若い者の目が覺めるのを待つことにした。シエリーは親戚や友人から遠く離れたこのエディンバラで、而かも漸く十六歳になつた計りの妻を抱へて、殆んど爲す術を知らなかつたが、例の寬大なピルフォード大佐が、甥の身の上に同情して、金を送つて助けて呉れた。」

シエリーはエディンバラに一と月あまり滯在してヨークに去つたが、この時從兄チャールズ、グローヴの助言によつて、ノーフォーク公爵に手紙を送り、父との調停を賴んだのである。父も祖父サービッシュも、公爵の執成しを顧ないわけには行かなかつた。祖父は豫ねてから、財產を分配しないで、長子に相續せしめたい考へであつたが、シエリーが家督相續の曉には、財產を弟妹や友人に分配しようとする意志のあることを識つて、伯父ピルフォード大佐を通じて、若しシエリーが財產を己が長男に讓るか、若し子の無い場合には弟のジョンに與へる約束をしたならば、改めて年額二千磅の送金をしようといふ內意を傳へたのである。シエリーは斷乎として之を謝絕した。彼は理性によりて人類が完全の域に達しうることを信じたものである。不義不德の人間が財產を私有して、正直な人間が貧乏に苦しむ社會を呪ひ、財產は之を人類の幸福の爲めに利用しうべき人が、初めて所有する權利のあることを主張した。されば未だ生れない自分の子供の賢愚を考へないで、長子であるが故に、無條件に財產を相續せしめるといふやうな申出に同意することは出來なかつた。又た彼は相續問題に關するこの決心に滿足した。

然しながらシエリーの父は、息子に金を送らないことは、反つて墮落の因を爲すものと心配して、年額二百磅を與へることにしたものと思はれる。されば シエリーがこのことを友人ミスヒチエナーに報じた書簡にも、『父は私が他人に詐欺的行爲をしないやうにさうしたのです』とある。又た妻ハリエットの父も、シエリー夫妻が、懷中無一物で、公爵邸を訪ねたことを聞いて、娘に同じく年額二百磅を送ることにしたから、シエリーも漸く窮境を脫することが出來たのであつた。

その翌年（一八一二年）の末には、この宛がひ扶持で、その日のくらしが立行かぬやうになつて來た。シエリーは絕えず旅行をした。又た慈善事業に費つた金も夥しいものであつた。書籍の購入に投じた金も少くない。彼の放浪生活中、到る所で集めた書物をまとめたならば、立派な圖書館が出來たことゝ考へられて居る且つこの當時妻は姙娠中で、翌年の春のお產が期待されてゐた。從つて家計も漸次膨脹して――尤も妻が良人の趣味や意志に反して、贅澤をした爲めでもあつたが――父に手紙を出して增額を賴んだけれども聞入れられなかつた。彼はその翌年になると、借金は次第にかさむ一方で、殊にゴッドウインの窮狀を見るに忍びず色々と金錢上の援助をした爲めに、債權者の追求は益〻甚しくなり、父に面會して了解を得ようとしたが、またも不首尾に終つたのである。

一八一四年の夏に、シエリーは、ゴッドウインの娘で、後にその妻となつたメーリ及びその繼母の連れ子クラヽを伴うて、佛蘭西より瑞西に遊び、九月上旬にロンドンへ歸つたが、その後の生活は、彼の一生の中で、最も窮迫を極めた時代

であつた、彼は斷えず債鬼に責められ、又たゴッドウインからの要求にあつて、一方ならず心を苦しめた、彼が日々金策に奔走して、疲れ果てゝ夕方にしよんぼりと歸宅した有樣が、メーリの日記にまざ〳〵と窺はれる。僅かに五磅の金を得んが爲めに、秘藏の顯微鏡を賣つたも、この當時のことであつた。

一八一五年一月六日には、祖父のサー・ビッシュが八十三歳で死んだ。シェリーは新聞によつてこの凶事を知り、鄕里へ歸つたけれども、父はどうあつても家へ入れなかつた。祖父は財産――シェリーは二十四萬磅と考へて居たが、二十萬磅を下ることは無かつた――を子孫に繼紹せしめるために、色々の條件を遺書に認めて置いたので、この事に關して、シェリーはその父及び父の法律顧問との間に、度々交渉を重ねたが、結局一箇年一千磅の送金を受けることゝなり、且つ負債を償却して貰つたので、以前の行詰つた生活は緩和されたが、その中に二百磅は當時別居して居た妻子に與へ、大部分は慈善事業に費して終つた。彼がマーローに居住してゐた當時（一八一七、一八年）貧民窟を訪づれて、惠んだ金品は多額に上つたのであつた。

彼は素封家の長男と生れて、一時金に窮したことはあつたけれども、所謂グラッブ街の文士が嘗めたやうな、苦しい思ひをしたことはなかつた。キールスペンサーの晩年のやうに、パンさへも得られなくて、のたれ死にをするやうな悲慘な境遇に陷ることはなかつたのである。然るに彼はかうした身分でありながら、衣食に費を盡すやうなことは斷じてなかつた。彼を慕うて瑞西から伊太利まで、交際を求めて來たトレローニが、初對面の印象を記したものを見ると、切りつめた仕立方のヂャケツを着てゐたやうである。又た食事の如きも、主義として菜食を實行し、文字通りにパンのみで生きて居た。パンにプデイングでも添へたならば、それが何よりの御馳走であつた。酒は決して用ゐたことがなく、大抵は水を飲んでゐた。茶は好物であつた。彼が父より送られた金は、その大部分を、旅行と書物と慈善行爲と友人どもの救濟に費して終つた。旅行は自然詩人として、自然の靈に融合した彼には、缺くべからざる精神上の糧であつた。書物は學者として、希臘拉丁の古典はいふまでもなく、佛獨伊西の哲學や文學に通じた彼には、一日も手離すことの出來ない伴侶であつた。彼の貴さは、この純眞な無垢な無技巧な、そして所有慾の少しもない、玉のやうな人格に有らねばならぬ。詩人フランシストムソンは彼を評して「愚かな小供」といつたが、勿論『愚か』とは、之を文字通りに解すべきではない。惡い意味に於ける『悧巧』の反意語である。今の世の中は、決して悧巧者の少いのを憂ふるに足りないが、シェリーのやうな所有慾のない人格者の見當らないのが殘念である、然しながらかうした經濟組織の世の中には、木に緣つて魚を求むるの類かも知れないが、兎に角彼の詩歌と人格とを推奬するのは、或は一服の清涼劑を投ずる所以ではなからうか。

或る聖者の御話

栗村雄吉

價値觀念の低い者がより高い者の言つた言葉をさも解つたらしく考へることは怖ろしいことだ、しかし何れ丈け人がこの怖ろしい誤りに卷かれて居ることだらう、瞬間に住はず無限に居らぬ者が瞬間や無限や絕對を弄ぶ、私達は「この儘だ」と云ふ言葉の前に親鸞二十

年の苦しみのあることを知らればならぬ。

自ら行なひ自ら省みて內なる價値階段を登つて行くのが人の目的ではないか、其の他に何にがあらう、人生が漂着に終らない樣に人は先づ自らの中なる聖者に人生の方針を授けらるべきである、さも無ければ三十五節で走つても人生は遂に漂着に終る、一切の行爲總ての瞬間をこの目的に捧げた時に人は生き甲斐があらう自らが價値の世界に入るが故に、自らが自然に歸るが故に見る一切の物自然は價値づけられる、早く自然と我とのみの世界に入り度いものである。

私は今、或る尊き方の御話しを御傳へするに當つて唯誤りの無い樣にとのみ祈る。

根源に入らうとしなければ神は求められない物を相對的に見るから、客觀的に見るから佛は求められない。

あなた方は此處へ道を聞きに來た神を求めよふとして來た、その力が神である、諸君が學校へ行つて勉强するのも世の中の總てのものがこの力から出る。

この力を吸收し得ないのは思想が不健全だからだ、肉體にても不健全であれば養分は吸收し得ない、此の力を見出さないのは自己の力が足りないからだ。

此の力を養ふには先づ自己を知れ、そうしなければ力を養ふことは出來ない、自分に力の無いことを知るのが先決問題である、養ふ養はぬは其の後に來るべきものである、自分が偉くならうとするには自分が偉くないことを知るのが先だ、金を儲け樣とするには自分に金の無いことを知り用ふべき必要があるからだ、故に自覺と云ふことである。

自覺が無いと幻想に走る、皆幻を追ふことになる、その表徵としては放縱になる。

極端に云へば自分が馬鹿であることを知つた人は既に馬鹿でない、世界一の馬鹿者であることを知り得た時に世界一の賢い人になつて居る、夫が伸々出來ないのだ、親鸞聖人の自覺したのも之れが起點である。

聖人が或る時乞食に物を與へた、其の乞食は別に嬉し相な顏もしないので、嬉しくないかと言つたら「貰つた私よりも吳れた貴方が嬉しくは無いか」と答へた聖人には自省があつたので飄然と自分を悟つた。

聖人には自省があつたから道德の基準をつかんで了つた、健かであつたから吸收した、神が乞食を使つて與へた滋養分を吸收した、實在は總ての物を使つて自己を示して居る。

之れを先づ決めなければいけない、そうしないと何をしても何を言つても無益になつて失ふ、物を食べてもお腹の空いて居る事を知つて食べなければ無益だ、お腹が空いて居ないのに物を食べてもつまらない。

過去の聖者が一切を捨てよと云つて居るのも要するにそうである、さつき云つた樣に自分が世界一の馬鹿であることを知つた時に自分が世界一の偉い者になつて居ると同樣に自分が一切を捨て得た時に一切を得て居る、此の世が暗黑であることを知り得た時に光明は輝いて居る、自分の世界が地獄である事を知り得た時に天國に居る、伸々馬鹿だとは思へないものだ、馬鹿だと云ふことを知る稽古をするのが物を知ることになる、そしたら宇宙間の森羅萬象は悉く敎へて吳れる、蟲も山も川も……一切と話が出來る、未だ現實の世界計りで無く過去の死んだ人も現前する、生き上つて吳る、馬鹿であることを知るのは却々難しい、一口に云へばこれであるが却々馬鹿だとは思へない、地獄だとは思へない自分が暗に彷徨つて居るとは思へないものだ。

要するに自分を此處に運んだ力に神を見るのだ、此處には神は無い、此處に神を見ようとするのはつまり緊張しない結果である、非常に表面的で輕薄である、そして透觀力がつかないのである非常に近視眼である近視眼を通り越して盲目になつて失ふ、だから師は「人皆眠れる暗の世である」と仰言つた、一休は人を骸骨と云ひゲーテは彫刻と云つた、自覺とか大覺とか天國に入るとか云ふのは自己を見終ることである、つまり今話した言葉で云へば自分の馬鹿であることを知り了ることである。

之れから出たものが自尊心である、これから出た心でないと夫れは慢心だ、慾望も自分が馬鹿な事を知つての慾望でなければ有害である總て有害である。

自尊心であると思つた事が慢心である如く世の中の人は人の爲めに國家の爲めに社會の爲めにと働いて居る積りでも自分の馬鹿なことを知らないのでは人の爲めにも國家の爲めにもならない、自分の馬鹿なことを知らなければ不平が起る不平には苛責が來る、苛責が來なければ人の本心に反する事をやつて居るから其處に恐怖がある、夢を見て居るのだ、正しいと思つても夢の中に居るから正しくない、故に國家觀にしろ世界觀にしろ總て誤る。

尙御傳へし度いことは澤山に殘つて居る、私は又次に機會を見て御傳へし度いと思つてゐる。

或る蛇の獨白

瀧波鶴藏

（晩春の一日、人氣のない深山の中腹の小さい穴から這出てきた一匹の蛇が、折からの暖かい陽（ひ）を浴びながら、獨白（ひとりごと）をいつてゐる……。）

この俺に、今迄世界觀なるものがあるとすれば、確に今日は根柢からの大動搖が起つた筈だ、自分がこれ

迄一番いたいものにして、回避せられる丈してきた秘密のポイントは、今日といふ今日無殘にも芯の中まで刳り出されて、皆んなの前で拭ふべからざる汚點を押されてしまつた。俺はたゞ泣入りたいばかりだ。俺を罵倒したあの雉を憾む氣は毛頭無い。又そうかといつて、生みの親に對して抗議を申込む理由も資格もない。たゞ總てが一の大きい運命だと諦める外仕方がないのだ。しかし俺にはあの雉がバタ〳〵羽ばたきしながら遂げて行くとき、「ソロモンの力もお前のその長いおぞげたつたからだではれ――。」とせゝら笑ひ乍ら捨科白をいつた文句が、今更ながら早鐘のやうに強く耳朶にひゞいてくる。尤もの事だ。だがしかし初めあれを聞いたとき、俺の血は逆上した。「何にッ！と」いきなり彼奴に飛付いて、一息に咬殺してしまはうと正に飛びかゝる姿勢までしたのだが、急に何かしら心の奥底から威嚴ある聲で「ならぬ」と命令したので、そのまゝ其處に俯いてしまつたのだつた。今から考へて見るとあの時默つてゐてよかつたとさへ思ふ。もし彼に仕返しの積りで飛付くなり又はきつい皮肉でも浴せて見よ。どんなにか彼は傷けられる事だらう。自分の苦しみは自分一個さへ忍べば濟む事だ。きらはれる者が大きい顔して、他の者達の中へはいりこんで行つたり、他の者と同等の權利を主張したりする事が出來ないのは當然の事なのだ。丁度俺達の仲間で力の無いものは始終強いものにへイコラしてゐると同樣に、彼奴等には俺達とはすつかり違つた別の世界があるのだ……。

しかし、忌嫌はれるからといつて、そんなに迄悲觀してしまふにも及ばぬのぢやなからうか。いやがられるものがあるからこそ、すかれるものがあるのだ。元來、絶耐の好き嫌ひなんてどこにあるのだ。若し此の世界からきらはれるものきたないものを總て取去つて、いゝものばかりを殘したとして見よ。それでも、よしわるしは、矢張現在と同等の差違で殘る事だらう。例へば、同じ孔雀にしてみても、その羽なら羽の間丈で、紋の形、大きさ、羽の長さ、色の濃淡等で幾分の差違はあるに違ひない。そしてそのほん僅かの差は、現在そこら近邊にゐる不具者のやうなきたない奴と、それから最上の奴との差と同等の程度を有するに至るだらう。この事は。この相對世界の現標準さへ取りのけて考へたら直ぐわかる。又本當に一分一厘の差違のきたなさをも除いた殘りばかりだつたら、それはもう、いゝとかきれいなどゝは云へまい。それらのみの世界では、きれいとかきたないなどゝいふ事は、全然ない事だ。

然し乍ら、ともあれ、きらはれる者や見若しいものは不幸なものだ。彼等は、美しいものに必然に伴ふべき一の附屬具、犧牲である。きれいな孔雀や極樂鳥が世界中の禽獸から――その中には無數の青春に富む雌雄がゐゝ事だらうが――讃美と憧憬との焦點になつて驚くばかり麗しい樂園で、酒と女との交響樂に、この世で許された凡ゆる歡樂と放逸とに、心ゆく迄陶醉してゐるとき、此處には、悲慘なばかり暗い陰氣な、じめ〳〵した土の中で、總てのものから冷たい眼と嘲笑的な口吻とに、ちゞみ上つてゐる我々蛇の同類がゐる。そして、それらの哀れな蛇の煩悶、苦惱、焦燥は、孔雀や極樂鳥の享樂してゐる甘味、放逸、悦樂とは到底比較し得ない軽軽がある。同じく生を享け乍ら、總てのものゝ經驗する生涯に於ける最高頂たる戀愛、情緒音樂……から無理强ひに眼を背けさせて、たゞ自分のこの長いぞろ〳〵したからだを恥ぢながら、淋しい墓場へと歩む我々蛇類を想出すとき、今迄嬉しさうに皆んなと一緒にはしやぎ廻つてゐた氣分から、いきなり奈落の淵へつき落されたやうにはつと目覺める。若し何物かゞあつて、その者がこの宇宙の總てのものを創造したのならば、吾々はそいつに對し「こんなに迄悲慘な犧牲者を出さなくとも、もつと外にいくらでも採るべき方法があつたらう。」と云ひたい。地上何%かあるそれらの連中は、一體どうしたら償ひをつけられるのだ。吾々は聖者ではないのだから、口の先ではともかく、内心まで絶對だの超越だのと理屈のみの世界にはなられない。强烈な刺戟にあへば燃ゆる心も起るし瑞々しい美に向つては、その前に跪いて接吻したい氣にもなる。蛇だつて蜈蚣だつて、情緒神經は、孔雀や極樂鳥と圖樣に與へられてゐるのだ。否それは幾百回かの「試み」にあつて、どれほど鋭く尖らされてゐるかしれないのだ。

自分は嘗てこんな事を思つて見た事があつた。「この世界は力と雌だ。そして、力さへあつたら他の條件は皆んな容易く得られる。この前には、孔雀も極樂鳥も馬も熊もない。力は萬能だ。と。そしてこの信念は、自分を今日迄來させた唯一のなぐさみだつたが、此の頃では、そんな事が達せられた丈で、滿足出來やうとは思はれなくなつた。力で眞の戀愛が買へるか。眞の憧憬、眞の讃美が得られるか。勿論、價値意識は美意識より大かもしれぬ。しかし之れを以て、前者を後者に代用する事は不可能の事だ。美は何處までも嚴然として存在するのだ。孔雀や極樂鳥は何處までも惠まれてゐるのだ。「世界のものは平等に惠まれてゐる。」なんて眞赤な嘘だ。力の足らぬ者は努力次第で强くなれる可能性もあらうが、我々蛇には、何の手段方法もない强ひて云つたら、たゞ恐ろしい自殺がある丈だ。意思の弱い自分には、その事を思ふさへたまらなく恐い。矢張喘ぎ〳〵一日一日を送られねばならないのだ。孔雀や極樂鳥は實だ。俺は、麗しい鳥獸のすべてを讃美する。俺がもし孔雀にでもなりうるとしたら、俺のもつてゐる一切のもの――力も、頭腦も、又このよくきく毒汁をも喜んで捨てる、それは、決して世界一の孔雀になりたいといふのではない。せめて雑子位になれたらいゝのだ。嗚呼、致命的な、癒ゆべからざる傷をもつた我々蛇の仲間は、此後一瞬もこの苦しい惱みから離れ得ずに、最も樂しかるべき青春時代をトボ〳〵喘いで行く事だらう。（完）

詩歌

汽車のうた　斷章五つ

大手潤

I

童兒あり、
その振袖がかなしけれ、一すぢに我汽車は走れども。
綺麗なるなやましきOsaka語にて口動かせるがうらがなし。
ませたるかほに、母と居ならび
只專念にもの云へるなど
あはれ、はた、忘れかねたるけしきなりしか。

II

雨ふるがゆゑ、雨ふるがゆゑ。
雨は窓より來り、ひたひと思ひ出しては胸ばたをうつ。
待ち合はす一ときはこの部屋に人の氣は更になし。
さて白列車、青列車、番號をつけて、はた、美はしく煤けたる貨物車も、三つ四つとしきりましに通れども
此驛にとまるやつなし、それがうれしい。
何事も思ふことなし、何もかも讀みたくはなしつくねんと
さまざまに座りてはゐる、汽車の悦び。

III

夕まぐれ、降り立ちて、のろ〳〵と牛の如くに、汗にみち、
歸路はゐならびし別莊のみち、
まがき、いけがき、べえぶめんど。

――ぱぱあ、ぱぱあ、ぱぱあさん。
うなだれしくびをあぐれは、うすやみに、仄白くてんだあ、
ふえーす、おふ、あ、やんぐ、まゝあ。さて
まんまるな四つ五つのきゆーぴーのかほは背の上にあり。

――ぱぱあ、ぱぱあさん。

困じたる聲はうす青く路ばたを轉び、このおかしき幼兒のふあらしいよ。

――すねば、すねば。とんぱぱ、すねば。ぱーやいやですよ
あれはよそのおぢさん。

夕まぐれ、汗にみち、のろ〳〵と牛の如くに、別莊みちを歩いてゐると。

IV

人前にて、待合室にて、詩をかけり。われ、何とも思はずかけど、人は如何に眺め居るならむ。人前にて詩をかけど。つくろいて、さも手紙でもかくごとく、忙しくペンをかなぐ

る。
人は新聞をよみ、講談をよみ、小說をよみ、
欠伸する人もあり、何となくたゞ、北叟笑む人もあり、みな〳〵、なつかしき心地して。

V

——かうべ、かうべ、かうべ。
一心にはなをいぢれる三十のひと。洋服を着たる人にあらずや。いくらなんでも。
あはれ大きなのすとりる、みる〳〵中にひろごりて、あゝ、
ごろ〳〵と黑きかたまり、
一體どこへ捨てませう。
——かうべ、かうべ。かうべ。　（以上自四月至六月）

綠蔭狂想

淋しき我が左右を見て

幸雄

他鄕の苦心、何ぞかこたむ、
友ありて我を慰め、我亦慰む。
あゝ樂しくありし丘の上よ。

川流を汲むに、何時しか濁る、
友あれど我を捨て、我亦去る。

お、淋しくなりし丘の上よ。

朝の幻忽ち消え、
夕の夢忽ち醒む、
而して
花ある如き園に、惡魔踊る。

何ぞ選ばむ、惡魔と我と、
お、友よ、
再び歸へれ、
この、この狂へる我が胸に。

ユンゲ、ライデン

みどり

▲ほし

星が殘らずかゞやくなかに
たつた一つをわたしは目つけ出した
それは不思議にも今水でもくゞつて來たやうに
小さい黑曜石の瞳を二つもつてゐた。

▲寶石

世の一番いゝ寶石は
あなたの胸にソッとしまつてある、
そうしてそれを目つけたたつた一人は
このわたしがあるばかり。

▲なんにも知らないあの人に

何にも知らないあの人に
何かをわたしは求めてきた
そうして屹度成就することで
一番正しい文法だともかんがへて。

▲夕べの唄

ひともし頃にたゞひとり
机にまればかなしいわ
たつたひとりのあの人に
手紙もかけない今の身が。

雜

今田益三

あひるのむれ水あびすればをさな兒は聲うちあげてよろこびにけり
かのあひる何をするぞとをさな兒はいぶかしみ母に問ひにけるかも
わが來ればよしきり一つ水ぎはの草むらを出でゝ飛びゆきにけり
よしきりは向ひの岸の枯蘆の小枝ゆすりてしきりになくも
水增せる河の水面にほのぼのと遠き夕やけの映ゆる靜かさ
朝空の澄みとほる中に啼きつるゝ燕の聲はさはやかなるも
朝風に梧桐の梢葉のゆれうごきやまずさら〳〵音の涼しさ
あらしかも近づきゝたるもろこしの長葉のなびきすさまじく鳴れり
雨しとしと山けぶりたり家も道も草木皆濡れたり田には水滿ちたり（雨を喜ぶ）
ふつ〳〵とふきいづる汗を拭けど拭けど身ぬちを熱みやりどころなし
目のもとに身ゆるぎをせずたゞずめばやがて出でゝ來る汗のくるしさ
一しきりむらがり起る想念のもろ〳〵悲し苦しきるかも
ポプラーの群葉の小葉のもろ〳〵の光りひるがへり小止みあらなく
梧桐の葉の大き廣葉のうちおほふ蔭をあかるく草苅りそけたり

梅雨抄

武井勇二

花ざくろしだれ咲く下に庭土をいぢりつゝ童は何か云ひをり
窓の灯のとゞくなつめのしだり枝に居て啼くらしもきりぐ〳〵すの聲
月明り木賊のかげにきり〳〵すひそかにをりて啼きにけるかも
木莓をこゝだも持てる童の頰にあらはなるかも蚊に食はれし跡
夕まけて雨上るらし切れ雲の裏照る光かすかなるかも

雨はれて夕べ明るき畑路を傘廻しつゝ童等は歸り來
夕くらきさ庭の隈に咲き垂れていよ〳〵青し紫陽花の花
日を並めて降る五月雨に庭の石あらはにぬれて苔の花咲けり
ゆすら梅それの粒實のうす甘き味にもなれて夏立ちにけり

青葉の頃

大山功

猿澤の池とりまける人多き奈良公園の初夏の晝すぎ
（猿澤池畔にて）

初夏の青葉の中に包まるゝ五重塔のなつかしきかも
（興福寺の五重塔を見て）

春日道上るまに〳〵ほの見ゆる白きパラソル初夏來る
（春日道にて）

薄曇り雨もよひせる夕暮に水田の蛙しきりになけり（梅雨）

雨もよい雲とざす空に二つ三つ水鳥泛る海原の上を
（梅雨の日海岸に立ちて）

四人集

善生

人の世の生計のつらき山沿ひの段々畑に麥の芽短か（山陰愁旅）

北國に來て落つかず家々の屋根の甍の赤黒きさま

木材を挽く音のみぞ動きたるものなりと知る鳥取のまち

船影の見えざる所何かなしに莊嚴の氣の襲ふ海かな

潮ざゐを聞の小唄と聞きならし始めて詣づ名和のみやしろ
夕風にしばしまどろむ宍道湖は若きをのこの歌を浮べぬ
からころと松江大橋行く人の足音來る聞のしゞまに
良きえにし賜へと祈る出雲路の大御社に霰たばしる
掛卷くも畏き御屋根檜皮落ち霰まろびぬ春淺くして

たかはる

春逝きて若き黄の芽は青を加へ物知る頃の寂しさ迫れる（春逝く頃）

逝く春の夕べの空に立つけむり寂しきわれの心にも似て

何物かを得んと力めて朝夕に獨り歩めり細き山路を

吾獨りポプラに倚りて星を見つむ求むる國は彼處と思ひて

雛げしの庭に咲く頃又來んぬ君と語らふ時は何時頃

五月雨にぬれし眞黑き土の上に靜かに落つる雛げしのはな

燈なき部屋に訪づる雨聞けばかすかに知らるゝ君がさゝやき

眞夜中に目覺めて見れば雨はれてすゞしき月の顏を照せる

碧生

遠近にみのかさ消えて五月雨るゝ小唄うたへば夕べうれしき（暮春）

人遠くわれはうれしくたゞ一人砂にまろべば潮のみちくる

月夜よし今宵靜かに文机に何はともなく夜の更けゆく

春逝けば惱ましごとのみかすゝと秋にまさりて淋しき我が胸

藤の屋生

眞赤なるあさひの出づる東を今日も生きんと我をろがみぬ（我若ければ）

若き者我に幸あり青春の血潮は深く胸にわきたつ

村を出て又麥畑よ麥笛を又吹き乍ら歩みつゞけぬ（夏來れり）

雨かとてフトたゞすみ桑畑の葉傳ひにおつる朝つゆの音

一年を西と東に別れしも東なる人今既に亡し（偶感）

若き僧の讀經の聲を聞く折は春の今宵も餘りに寂し

もろ手をばサト投げ出す哀れ月寂しき我はこゝに君見る

攝取不捨

葭生

清明な五月の朝の小田水に尙ほ啼きつゞくる蛙や、はかない色に咲いて西方淨土の便りを想はするやうな紫陽花や、暑きに過ぐる日は愛しとまで思はるゝ夾竹桃。

空曇りて物影うつらぬ日や、晴れ間晴れ間の暑熱や、淡彩な山と靄との墨繪をひく夕べや、この一時を夏の序曲として自然はさまざまな象に織りなして行く。

明け日さす小田水に啼く蛙愛し
雨ひと日紫陽花堪へで地に伏す
紫陽花に幾日冷めたく夕雨めり
夕づく日弱ければ紫陽花の色淡く
紫陽花に佛戀ひしき五月寒
夾竹桃軒にせまりて咲きくづる
夾竹桃己れ血はきて花染むる
夾竹桃狂して赤き花を賞づ
霰しばし舞めき伏すや夏の草
（この十日あまりを病み暮す）
檐に坐して病む我れ夏の草厭ふ

夏雜

赤峯

梅雨淋し惱み心にはや暮るゝ
眼の病怠らずして梅雨うとし
世をうとみ友と語らず梅雨一と日
雨一と日日照り一と日の田植かな
黄ばみ葉の垂れ行く晝や夾竹桃
洋館の蔭なき午や夾竹桃
血で畫く夾竹桃や日三竿
毒草や日照り續きの夾竹桃
水馬一つの草を舞ひ廻る
苗代の拔かれし跡や水馬
落魄の公卿住む里や薫香衣
掛香や京に生れて宮仕へ
片戀の主とあひたり薫香衣
圓山へ祇園拔け行く日傘かな
繪日傘や稽古戻りの祇園町
靜けさを下駄の鈴鳴る日傘かな
別莊の日傘集る地曳網

夏

小曲　大山功

坂の上に　まぶしく光る　小さな石ころにも
若々しい夏の囁がこもつてゐる。
海岸に　ならびたつ　海水浴の赤い旗にも
若々しい夏の囁がこもつてゐる。

研究だより

海上保險科

指導教授　岩本　先生

研究部員　二名（外ニ部員外研究一名）

新學期が始つたと思つてゐる中にもう暑中休暇が眼の前に迫つて來まして私共の科を御紹介申上げる機會を逸してしまひましたが遲蒔きながら責を果すがために今迄の研究の經過をも併せて御知らせいたします。

海上保險科は元來他の科に比して餘りパッとしない方で、それに今年は部員が只二人だけですから存在を認められることも少い樣です。然し內部に入つて見ればそれだけ他の科に見られない所があると思ひます縱令他の科で獨逸何大學式だとか英國何大學式だ等と云はうとも「研究者二人に指導教官一人」と云ふ事は我科の誇でなければなりません。私共は第三指導室の一個の卓子を三人で圍んで全く座談的にやつてゐます、隨つて酒研の時間は指導の時間であり討論の時間であり質問の時間であり同時に又報告の時間でもあるのです、と云つて全く無秩序にやつてゐるのでは決してありません裏國のカーレーのレクチュアを大體の道筋として指導と報告が交互に行れてゐます。只その指導なり報告なりの途中何時でも質問なり議論が出來ると云ふのです、之は十何人かの部員のある科では到底味はひ得られないことでせう。四月以來指導として不可抗力、共同海損、ヨークアントワープルール、報告として海難救助、船舶衝突、委付等の研究が濟みました。そして六月二十一日には海運科と合同で深江の高等商船學校へ見學に行き船舶の模型。實物機械、器具等に就き有益なる說明を聞いて來ました。あちらは船長養成所ですから私共と密接な關係がある理です B.L., Charter Party 等の研究では我に劣らないでせう。說明の勞を取られた先生も我々が專門的の質問をするので非常に喜んで熱心に說明してくれました。

船舶の構造等も實際に船に乘つて見ると案外わかり難いものださうですが模型について見れば一目瞭然たるものがありました。

もう暑中休暇も近いので休暇中は各自自由の研究が行はれること、思ひます、九月に入れば又新しい御饗りをする機會があることを信ずる次第であります。

（矢崎記）

研究發表

會計科研究室

「規範會計學發端」

（本號論壇所載）　矢部　利茂稿

社會政策科研究室

「コール氏ナショナルギルド論の梗概」

（本號論壇所載）　近藤　備稿

私法科

今田生

債權の本質に就て丑兄に呈す

債權の本質を論ぜんとする丑兄。

圖書館で思ひついた私の考を一寸君に告げませう。私は大發見のつもりだ。馬鹿な事であつたとしても笑はないで呉れたまへ。

あらゆる物象に對して吾人は內容的と形式的との二つの觀點を持ち得る。まづ、文化現象を內容的觀點から見ると歷史となり、歷史學の對象となる、丸に文化

現象を形式的の觀點から見ると所謂社會現象となり、文化科學の對象となる。

次に社會現象そのものに對し、內容的觀點をとれば經濟現象となり經濟學の對象となり、形式的觀點をとれば法律現象となり法律學の對象となる。

更に次に法律現象そのものを內容的觀點から見れば物權現象となり、形式的觀點から見ると債權現象となる。こゝに於て債權の正しき位置が與へられると思はれる。（丑兄、こんなことは先生にはないしよだよ。）

私の思ひつきはざつと上の樣なものです。併しもすこし考へて見よう。

法律に於ける物權と債權との關係を、經濟學に於ける財と貨幣との關係と對比させて見る。財は使用價値に關してゐて、貨幣は交換價値に關してゐる。ところがそれに對應して、物權は支配權であり債權は請求權である。財の効用は直接的第一次的、貨幣の効用は間接的第二次的である。物權の効力は直接的第一次的、債權の効力は間接的第二次的だ。

財が商品化し、金屬貨幣を生じ、それが信用化し、つひに全然實質的價値から脫却して、貨幣が單な數量的表現として觀念せらるゝに至るが如く、債權と物權との間にも種々なる Grade がある、典型的物權は所有權卽ち物上の絕對支配權で、地上權はその制限であるが、その制限はまだ內容的だ、質權抵當權等に至れば同じ制限でも形式的の制限である。債權の方から云ふと賃借權の如きは內容的色彩が濃厚で物權に近づく事大きく、他の債權でも、特定債權は種類債權よりも內容を多く含み、金錢債權に至つては最も形式的の樣に思はれる。（そんなことは僕はいためだ。君の畑だ。）

これ等を通じて効力の排他性と非排他性及び普遍性と特殊性の問題が横はる。（と思ふのだ。）

權利の本質、法律の本質、問題はそれからそれへと展開する。我等の視野は殆んど無限だ、だが法律も面白いもんですね。　失敬。

丘上短歌會

初夏の陽がまぐるほしい。夏草の匂ひ、草いきれが劇しく迫つて來る。さて、私共の「丘上」も第一集が生れた。靜かに見守つて伸び行く生命を樂しまう。我が丘上の友よ、この新しい悅びを俱に共に頒ちたい。これを機會に双手をひろげて飛びこんで來て貰ひたい。第二集第三集とすばらしく豐かに私共の日々の糧を盛つて行きたい。心ゆくばかりの歡喜をもてお知らせ致します。

七月一日（土）にはおこがましくも「丘上」の會と名づけて學生會館に第五回の短歌會を開いた。場所は皐月雨の午後に相應しく寂しい蘭の間で「丘上」のおそろしきまでの忌憚なき批評を中心として詠草互選を行つた。

尙ほ「丘上」第一集の內容をかゝして戴けば

序の言葉（木村秀樹）詩二篇（大手潤）純情集十五首（木村秀樹）雜詠七首（中川整）垂水にて十首（高津奈良男）春二月の旅二十六首（八木右一郎）青葉若葉十首（天野芳果）梅の實を落す八首（竹內きよし）初夏雜詠五首（山極三千夫）二匹の犬七首（大手潤）銀の海十二首（芳邨たけし）雜詠八首（笹脇正健）初夏抄八首（武井勇二）夾竹桃の花八首（鈴木敏正）

葉櫻俳筵

六月十九日夜、新しく柚灯、荻蒲、苗甫、迂碌、四君を加へて學生會館に同坐を催す。五月雨の空、降らんともせず、星月夜、籬の草の葉をいよ〳〵青からしむ。

夏雜。浴衣。螢。

水鄕の宿灯りたり螢飛ぶ　赤峯

渡舟の櫨音しきるや螢飛ぶ

古釘に膝脫けし浴衣かけ置けり

波ひけば日傘傾け貝拾ふ

毒草の穴まで蜥蜴追ひて見し　柚灯

ハンマーの亂れに暮れぬ五月雨

山門の黑きに一つ螢かな　汪碌
車掌臺に立ち話し行く浴衣哉
螢火の流れてうつる青葉崖　荻蒲
馬の背に青葉萎るゝ眞晝かな
螢みなはなちて旅に立ちにけり　菌甫
あき家の小庭茂れる夏の草
裾を引く麓路茂る夏の草　九鼎
螢狩人と離れて堤行く
杭の藻に潜みて灯す螢かな
螢一つ傷心を懷きて出でし門　霞生
遠き螢を頰杖ついて夜の机
獨酌や簾を洩れて月の煙
浴衣着て鏡に向ふ派手心
夕づく陽弱ければ紫陽花の色淡く
夾竹桃狂して汝れが花を賞づ

石山にて

浴衣のまゝ寺に詣づや旅にして

（後記）

分裂した片面的な現實にあきたらない心、呪詛や怨恨に滿ちた世間の意識に囚へられないで調和した靜平なわづらはしさのない自適を求むる心、おそらくは考ふる者なべてもが念ずる希願である。俳諧蕉門の心ざしは逃避の世界ではない。私達を育み養つてゐてくれる自然の懷にかへることである。大地に心を向けることである。丘上の生活にも此の一面が無ければならない事を信じる。既に句作してゐられる人としてゐられない人さを問はず、心ざしを持たるゝ人は私達の句鑑に集つていたゞきたい。（霞生記）

學生文庫新書目（二）

小さな灯　有島武郎本二人見　君一門　一九
逃避行　尾崎士郎本二松井彌七君二門　一五七
星座　有島武郎　同　新購入同　一五九
金と銀　谷崎潤一郎本三倉　君同　一六〇
子をつれて　葛西善藏　同　君同　一六一
地上第二部　島田清次郎本一藤井一則君同　一六二
地上第三部　同　國木田獨歩本二安間賢次君同　一六三
獨歩集　同　君同　一六四
櫻の實の熟する頃　島崎藤村　同　君同　一六五
少年行　中村星湖　同　君同　一六六
學生時代　久米正雄本二井上幸重君同　一六七
愛の惱み　石丸悟平本二藤本秀二君同　一六八
或る姉妹　谷崎精二　新購入同　一六九
飢え　ハムズン本三金田俊郎君同　三一
懺悔　ゴーリキ同　同　君同　三二
全譯ナ、ラシヤメンの父　鈴木泉三郎本三倉　君三門　三三
法成寺物語　谷崎潤一郎　同　君同　四五
訪るゝ女　江馬修　新購入同　四六
　　四七

廣告研究會

第三回例會

六月二十二日（第三木曜日）午後三時より本館會議室に於て

出席者二十二名

今回は卒業生和田信純君態々京都より出席せらる。十合吳服店主任木水榮太郎氏出席せらるゝ筈なりしも御都合にて見えず遺憾なり。

一、前會報告　木村秀樹君
一、研究發表
　廣告心理學　平野泰藏君

「歡客の商品に對する注意より商品の購買に至る心理を利用するもの卽廣告心理學なり」と說き起して、種々の略圖を用ひて心理學上に於ける注意圈視界の分析注意の動亂及び四字の效力を說明し、更に妨害價遵比遞減の法則及び强度比較遞增の法則を述べ、色の强度に及びて黑バックの白と白バックの黑との效果の比較及び批評を試み、更に進んで、對照快感不快感位置等に說き及ぼせり。

本講演は次回も引續き繼續せらるゝ筈

一、自由討論

吳服及雜貨の新聞廣告は朝刊夕刊何れが有效なりや

右の討論題につき各會員の意見を述べたり。その大要は次の如し。

和田信純君。夕刊說

吳服雜貨の廣告は主として婦人相手なり。廣告をなす商店は三越大丸十合その他の大商店に限る。吳服雜貨は可成早く廣告すべきものなり。

右の前提に基き婦人相手の吳服雜貨廣告は夕刊を可とす。その理由とする處は朝刊は夕刊に比し高級なり。婦人は男子に比し低級なり。故に朝刊は男子の讀者多く夕刊は婦人の讀者多し。婦人は朝は多忙に

して新聞を見るべき暇少きも夜は夕食後一家團欒の席にて夕刊を讀むこと多し。從つて吳服雜貨の廣告に對し注意を引くこと多く、且これが購買を主人に相談すべき好時期を捕へ易し。又米國に於ては夕刊說を唱ふる學者あり、實際に於ても夕刊廣告を多しとす。

木村秀樹君。朝刊說

和田君の說と全然反對の立場に立つて朝刊說を主張す。和田君の吳服雜貨は婦人相手なりといふは同感なるも、婦人は低級なるが故に夕刊を讀むとの說には同意し難し。吳服雜貨に關する婦人の常識は寧ろ男子よりも高級なり。從つて婦人の高級なる趣味に訴ふべき吳服廣告は夕刊に比し高級なるべき朝刊になすべきにあらざるや。又婦人は朝は多忙なりといへるに對し、余の知れる範圍の婦人につき問ねたるに寧ろ反對の回答を得たり。卽ち朝主人の出勤を送り出し後掃除その他家事の一段落を告げてより夕食準備前までは全く婦人自身の時間なり。この時間に於て見るものは新聞なり。故に朝刊はゆつくり讀むことを、之れに反し夕刊は夕方多忙の時期に配布され、ゆつくり讀む機會なし殊に婦人は夕餉後子女の就寢に至るまでは用事多く、やうやく暇を得たる時は既に夜おそし。かくて讀む夕刊の記事はその日の出來事にすぎず。深く廣告に注意する餘裕なし。又米國に於ては夕刊說行はるといふも彼國の如く新聞の普及廣く殊に夕刊新聞のみ獨立して經營せられたるが如き殘達せる事情を以て直に我國の如き新聞普及の餘り廣からざる處に應用するはやゝ誤りにならざるや。本邦は本邦獨特の事情に基きて決すべきにあらざるや。

平野泰藏君。朝刊說

男子の讀書傾向は外部的にして女子は內部的なり。朝刊は內部的にして夕刊は外部的なり。從て朝刊は夕刊に比し女子の讀者多し。又新聞保存上より見る時は朝刊は夕刊に比し永久的なり。故に朝刊說を採る。

須藤先生。折衷說

先づ考ふべきは朝刊夕刊の發行部數なり。夕刊は朝刊に比し絕對的發行數少し。朝刊は夕刊に比し品位高し。新着廣告諸種の催し廣告は夕刊によるを便なりとす。

以上の如く朝刊說を可とするもの夕刊說を可とするもの或は折衷說を採るもの等あれど未だ結論に達せず是非の斷案は後日實際經驗ある方を聘してその意見を聞くことゝなす。

神高商エスペランド協會報告

第一回會合を六月二十六日（月）に新講堂バックルームで、開きました。集る者十一人夏期休暇までの大略の方針も定めました。

夫れは二十七日から毎晝休みの時間に集つて講習をやるといふ事です。講習用書物は

八木氏著　エスペラント講習讀本（三十五錢）

です。秋にもなれば大方研究の程度も進むことですから繼つた運動が出來ます。

エスペラント同志者は夏休みの間に大いに御研究をお願ひいたします。

御尋ねの事は夏休みの間でも好いですから本校內エスペラント協會宛にお手紙を下されば早速御返事致します。會員は今のところ左の通りです。

橋本雅義　中宮長一　龍神厚
相谷吉太郎　池田半治　山村忍夫
藤井一則　中川整　高井修一
石光勝　藤田馬太郎

筒臺日誌

△六月十一日　野球部京大と京二中校庭に戰ひ、三A對一にて之を破る。

△六月十四日　講演部主催の本一豫科雄辯大會あり。

△六月十五日　對加州大學庭球戰、鳴尾に擧行、シングル全勝、ダブルは惜しくも敗る。

本年度夏期登山計畫發表

△六月十六日　陸上運動部、短距離大會。

△六月十七日　柔道部、御影師範と同校道場に於て練習仕合擧行。

第一回川崎造船所見學

本三及び豫科　葺合工場
本二及び本一　川崎本工場

△六月十九日　葉櫻俳句會、會館にて。

△六月二十日　日蓮鑽仰會例會。

△六月二十一日　取引所商研究外講演、『相場の運行に就きて』五十嵐力氏。

△六月二十二日　自由講座　內多教授『放浪の人シエリー』。

數理概論商研科外講演　佐藤教授

「相對性原理の數學的基礎」
第一回『非ユークリッド幾何學』
△六月二十四日　柔道部、校内紅白試合。
弓術部　豫科對級競射大會
劍道部　對縣商本一豫科練習戰。
第二回川崎工場見學。
水泳部　第三回夏期海濱合宿計畫發表。水清く人美しき伊勢二見ケ浦に、七月十三日より二日週間滯在の豫定。
此の夜七時より、音樂部主催公開音樂會を講堂に開催。風涼しき夕、和かなる氣分に浸らんと寄せ集る聽衆忽ち堂に滿つ。非常なる盛會なりき。
△六月二十八日　相撲部夏稽古開始。
△六月二十九日　第八回自由講座「シエリー論總括」内多教授。
數理概論　商研講演　佐藤教授
第二回『特殊相對性原理』
△六月三十日　校内圍碁大會　寄宿談話室にて。
午後三時よりレコードコンサートを開く、美妙なる樂の音に夏の暑さを忘れしむ。
△七月一日　第五回丘上短歌會、歌集丘上第一集發行。
本校内ポプラ倶樂部主催洋畫展覽會開催。

學友會各部申合報

去る五月二十五日特別委員會に於て次の申合せをなす。
一、學友會各部はマネヂヤー及びサブマネヂヤーを置く。
二、マネヂヤー及びサブマネヂヤー選任方法は各部に於て之を定む、但、サブリマネヂヤーは本科二年生以下の者より之を選任す。
三、マネヂヤー及びサブマネヂヤーは各部の會計其他一切の事務に關し責任を負ふものとす。
四、マネヂヤー及びサブマネヂヤーは退任後一箇年間在任中爲したる事項につき其責に任ずるものとす。
五、各部マネヂヤー及びサブマネヂヤーは各部を代表する特別委員として特別委員會に參加すべし。
六、特別委員會に於ては各特別委員は發言權を有す但し採決の場合に於ける議決權は一部に付一箇とす。
七、各部經費支出の請求者はマネヂヤー又はサブマネヂヤーとす。
八、本申合は特別委員會の決議を以て變更又は廢棄することを得
本申合は各部に於て一通宛後日の爲めに保存す。
大正十一年六月二十八日
與風部　陰山茂久爾　編纂部　木村　秀樹
語學部　牧野　廣吉　講演部　松永　一雄
柔道部　八木源治郎　劍道部　永松　直行
弓術部　原田　富一　登山部　矢野　雄俊
陸上運動部　江藤　順藏　庭球部　長谷川嘉三郎
野球部　中村清一郎　蹴球部　木阪規矩三
相撲部　安間　賢次　端艇部　下里巳之助
水泳部　愈非　兼　會計部　平野　泰藏

講演部

豫科本一

懸賞雄辯大會

六月十四日午後二時於新講堂

一、開會之辭　本三　矢部　利茂
一、太陽の下に　豫二　芝　好清
元氣もある、未來もあるやうだ、「古い辯士の型」にはまつた所のあるのが難。
一、馬鹿になり得ぬ者　豫一　太田庄之助
態度に見苦しい所はある、が豫科の人としては老人ぶり過ぎて居る。
一、人　豫一　市川　一夫
朗々元氣なものだ。態度も堂々、内容も可、只演說中に時々笑顔をする事は深くつゝしんでほしい。又もう少し落付きがあつてもいゝと思ふ。
一、今、他、理主義　豫一　中村　英夫

眞面目な演說。かう云ふ人がもつと勉强していゝ内容が出來るやうになつたらさし當り筒臺向だらう。
一、東亞の風雲と日華提携の急務　豫二　深谷　隆好
今日出た辯士の中で一番氣の勝つた人元氣もいゝが調子の速いために主旨の徹底しないのが難。
一、蜘蛛の銀絲　豫二　今井久次郎
手振りの妙なのがおかしいので、彌次の猛烈な事つたらなかつたが、それにも風せず終りまでつゞけたは感心。
一、所謂日支親善を排す　豫二　井藤譽志雄
立派な雄辯家だ。熱のあり過ぎる點が却つて難になつて居る。最も前途ある一人。
一、敬虔なる探求者　豫一　大槻　勳
流暢な辯だ。月や花や星が引つきりなしに出て來る。只稍くもすると安つぽいセンチメンタリズムに陷らんとする點は大いに注意。
一、地の果まで　本一　額田　巧
例へば立板に水を流し、鏡の上に球を轉がさば、かくも妙えなる音の出るかと思はるゝ程で、滿堂の聽衆をうならした。思ふにこんな毛色の變つた演說も一つ位ひはたしかにあつた方がよからう。
一、生活の單純化　本一　柳　昌平
多いやうで人の少い本一で將來我部を荷負ふ唯一の人だ。勉强と自重を望む。
一、海洋の自由　島木　教授
一、閉會之辭
辯士の顏ぶれの新しかつたためか近來にない大成功であつた。何れの辯士もなか〳〵元氣にまくしたてた。彌次も猛烈だつたが感心するやうなのは一もなかつた。たとへばがや〳〵とやかましい蛙共を前にしてしやべり散らしてるやうだ。彌次の貧弱に比して辯士の立派な事、想像以上であつた。若い諸君の堅實な發展を祈つて已まない。
當選者左の如し。
一等　豫一　市川　一夫
二等　豫二　井藤譽志雄
同　豫一　大槻　勳
三等　本一　柳　昌平
同　本一　額田　巧
同　豫二　芝　好清
—（松永記）—

第四回金曜講演（六月二十三日）

一、自然と人生　本三　久米川　俊君
一、思ひ出づるまゝに　本三　芳村　義則君

第五回金曜講演（六月三十日）

一、野次の哲學的一考察　本一　石井　馨君
前後五回かなりの聽衆であつた。本一、本二、本三總て出演したのに豫科の出なかつたのは、聊か不滿が致し方がないかも知れない。皆かなりよく喋つた。この叫びが、筒臺をして益々實質的に重きをなさしめる礎石となるであらう。辯士諸君に謹んで敬意を表する。（ア）

辯士派遣

六月十日大阪高商主催全國學生雄辯大會へ
あるユートピアンの話　本二　芥川　英二君

語學部

第二回會話旅行記事

六月二十四日（土）正午過ぎ校門に集つて、今曾は方面を變へて再度山へ會話旅行を催した。川崎造船の見學と衝突したのと、何分暑かつたのとで參加者は二十名に足らなかつたが、隨つて皆熱心な有志ばつかりだつたので面白く愉快であつた。水清い水源地を通りぬけたり、小川せゝらぐ谷を綠陰の涼しさに惠まれつゝ善助茶屋についた。サイダーやラムネで茶話會を催し後ち下山、諏訪山で解散したのは四時であつた。
我々の會話旅行が回を重ねるにつれ内容が充實するのを喜び、又更に向後多數諸兄の御參加あらん事を祈る。
當日暑さを御厭ひなく我々を御指導下つた鈴木先生に厚く御禮申上ます。（小川生）

庭球部

對加州大學戰

日本庭球界有史以來、未曾有の珍客加州大學庭球部選手一行四名は東都に於て五勝一敗一無勝負の好成績を齎し、意氣揚々西下して其の勇姿を鳴尾原頭に現はした。軟球を捨てゝ僅々二箇年足らず、其間長足の進歩は認められるけれども、之れを米國學生選手に比して如何なる地位を占め得るか。吾等は直ちに商神倶樂部をば組織して其の第二日、六月十五日に彼等と親交を結ぶ

を得た。

試合はベーツ對鳥羽のシングルに初まる。

ベーツ（二—六、六—三、四—六、二—六）鳥羽◎

(1)	ベーツ	3 1 4 6 1 1 3	2
	鳥羽	5 4 1 4 4 4 5	6
(2)	ベーツ	1 4 2 8 6 4 4 3 4	6
	鳥羽	4 2 4 6 4 2 2 5 1	3
(3)	ベーツ	2 1 2 6 4 2 4 1 4 4	4
	鳥羽	4 4 4 4 2 4 2 4 2 6	6
(4)	ベーツ	5 2 2 3 1 0 4 0	2
	鳥羽	3 4 4 5 4 4 2 4	6

ベーツ君はウエスト、パシフイツク、コーストでは一番、インター、カレッヂでは四番だと言はれて居る。彼の東都に於ける奮闘振りは彼の力量を十分に示して居る。各校の第一人者、太田、松田、原田、清水の諸君が誰れも申し合はしたやうに輕く押えられて居るのを見ても凡その見當はつくと思ふ。當日鳥羽の力戰は實に日本球界に一大偉彩たるを失はぬ。鳥羽の堅實なるプレーシングは漸々ベーツ君を壓して餘力を與えず物凄きベーツ君のサーブとボーレーを巧みに操りたるは其の勝因の大なるものならんか。

ウイルソン（三—六、六—三、一—六、二—六）眞田◎

(1)	ウイルソン	4 0 0 4 1 1 2 4 0	3
	眞田	0 4 4 2 4 4 4 2 4	6
(2)	ウイルソン	6 4 5 5 4 3 4 3 4	6
	眞田	4 2 3 3 6 5 2 5 0	3
(3)	ウイルソン	6 0 1 5 1 1 3	1
	眞田	8 4 4 3 4 4 5	6
(4)	ウイルソン	4 0 4 1 4 3 1 2	2
	眞田	2 4 6 4 2 5 4 4	6

ウイルソン氏は來朝以來、重に複試合に活躍して、單試合には僅に二回、而しながら木島、須田の二雄に勝ち續けて居るのである。此の日眞田の奮闘目醒しく第一セットには兩者に凡失も多かつたが眞田のサーブはよく敵を制して勝つ。第二セット兩者球定まるにつれてウイルソンのカッチングとネットプレーは屢々効を奏し眞田の善戰も及ばず敗れてセットオール。

第三セットに入りて眞田は積極的戰法をとりネットプレーに絶好のストップボーレー出て來、屢々コーナーを襲ふプレーシングに仕止む。第四セットも其の儘進んで茲に再び全勝のウイルソンを破る。

◎ベーツ・コンラッド（四—六、六—二、六—〇、六—三）鳥羽・和田

(1)	加	4 6 4 6 2 2 4 1 4 3	4
	神	1 4 0 8 4 4 6 4 1 5	6
(2)	加	5 7 4 4 4 0 4 5	6
	神	3 9 1 0 2 4 1 3	2
(3)	加	4 5 4 5 4 4	6
	神	0 3 1 3 1 2	0
(4)	加	4 2 4 6 4 5 1 2 4	6
	神	2 4 1 4 0 3 4 4 2	3

複試合においては彼等の最も得意とするところだけに堅障壁の如きボーレーは其のサーブと共に寸分の隙がない。第一セット初め三ゲームスを續いて取られ甚だ振はざりしに第四ゲームより鳥羽、和田共に當り出して形勢逆轉第一セットを收む。第二セット以下は敵の堅陣に我却つて自滅し、敵のロッピングに我が攻撃方を殺がれ壓せられ勝ちなるも挽回に勉め善戰亦善戰死力を盡したるも及ばず大勢遂に決して複試合を加大に讓る。

かくして吾等はベストメンバーで戰つた加大に對して、シングル全勝、ダブル負けの結果を得た。蓋し好結果たるを失はぬ。そして此の度は彼等より獲た收穫は可なりに豐富である。之れを機會として日本の庭球界が更に一段の進境に入ることは疑ひない。

尙ほ鳴尾に於ける國際庭球戰第三日からはデヴイスカップ爭奪戰にチルデン以下の心膽を寒からしめた其の一人熊谷氏の模範試合あり。第二日に於て加大の主將ベーツをして初めて慘敗を喫せしめた鳥羽は之れに出場其の花々しき活動は次のスコーアによつて窺はれる。

六月十七日（第三日）

◎熊谷（六—二、六—三、六—三）鳥羽

(1)	熊谷	4 2 8 4 1 4 4 7	6
	鳥羽	2 4 10 1 4 1 2 5	2
(2)	熊谷	2 6 4 2 4 3 6 5 4	6
	鳥羽	4 4 1 4 2 5 4 3 1	3
(3)	熊谷	4 4 5 1 4 1 3 4 5	6
	鳥羽	1 0 3 4 2 4 5 2 3	3

◎熊谷・鳥羽（六—〇、六—三、六—三）ベーツ・ウイルソン

(1)	熊、鳥	4 4 4 10 6 6	6
	ベ、ウ	1 2 1 8 4 4	0
(2)	熊、鳥	8 4 2 5 4 3 4 5 5	6
	ベ、ウ	6 6 4 3 1 5 1 3 3	3
(3)	熊、鳥	1 4 7 6 4 5 1 4 5	6
	ベ、ウ	4 2 5 4 6 3 4 2 3	3

六月十八日（最終日）

◎熊谷・鳥羽（六—二、六—一、六—〇）吉田・小林

(1)	熊、鳥	2 4 4 4 6 1 4 5	6
	吉、小	4 1 1 0 4 4 2 3	2
(2)	熊、鳥	7 6 6 4 4 1 4	6
	吉、小	5 4 4 2 1 4 1	1
(3)	熊、鳥	4 5 7 4 4 4	6
	吉、小	1 3 5 1 1 1	0

模範試合を通じて鳥羽は熊谷氏とシングルの對戰に於ても或は熊谷氏のパートナーとなつてダブルの戰に於ても絶好の當りを見せて居た。殊にダブルの對吉田小林(關西學院)に於ては鳥羽は熊谷氏を援けてと言ふよりは寧ろ熊谷氏に援けられて散々に打ち破つた。目醒しく活躍して居つた事は永久に忘れられない。之れで鳥羽個人としては關西學院の吉田、小林組を倒したのだが、更に一歩を進めて來るべき秋のトーナメントには是非神戸高商組として彼をして再び立つ能はざらしめ度い。

熊谷、鳥羽對吉田、小林の戰を最後に模範試合は終を告げたのであるが、閉戰後熊谷氏は更に練習マッチを特に鳥羽の爲めにして下さつた。

◎熊谷（七—五、六—四）鳥羽

(1)	熊谷	3 0 4 5 7 3 4 1 4 4 4 4	7
	鳥羽	5 4 1 3 5 5 6 4 1 2 2 1	5
(2)	熊谷	6 3 4 4 1 4 2 4 8 4	6
	鳥羽	4 5 2 1 4 0 4 0 10 1	4

野球部

對京都帝國大學戰

六月十一日　三A對一　勝

此の日前日來の雨名殘りなく晴れて絶好の野球日和なり我が部は京二中校庭に於て京大軍と一戰を交へたり午後三時五十分德川、倉重兩氏審判の下に彼の先攻にて開戰す。

△第一回　兩軍凡退、△第二回　彼凡打の後吾軍一死の後佐々木三遊間安打に出で續く中村の左前安打に進壘次いで兩者二三壘を重盜せしが柿本二飛、藤尾おしくも三振して好機を逸す、△第三回　彼三者無爲吾も西村安江各中前に安打して出でしが二死後なりし故無爲、△第四回、彼山田二壘をトンネルせしめて出で松村平井の犧打に三壘を占め投手の三壘牽制球の暴投に還り一點を先取す、吾軍中村の二越安打ありしのみ。△第五回　彼無死にして柴田投手の右を抜きて唯一の安打を飛ばし續く山內四球を利し走者一二壘に據りしが後續の三者西村投手に飜弄さる。吾軍一死の後藤尾右翼二壘打に出で稻田の三衛失に三壘に達し續く寺戸の適時左安打に裕々生還西村遊衛して寺戸三壘に封殺されしが安江の右翼安打に稻田還り二點を入れて一點の勝越となる、△第六回　兩軍三者凡打、△第七回　彼無爲吾稻田右翼柵越の三壘打を憂飛せしが後援なし△第八回　彼振はず、吾軍代りて二死の後佐々木中前安打に出で中村の左翼越の美事なる三壘打に長驅本壘に入る、△第九回　敵必死に攻め立てしも三者凡打に終る。時に午後五時三十分此の試合時間僅かに一時間と四十分なり。試合後京大主催の茶話會に招待され敵味方互に歡を盡して六時過ぎ引き揚げぬ。

彼我の成績左の如し。

本校		得點	打數	安打	犧打	盜壘	三振	四球	失策
5	稻田	三A	三三	一二	一	二	四	一	三
4	寺戸								
1	西村								
6	安江								
2	木村								
8	佐々木								
3	中村								
9	柿本								
7	藤尾								

京都大學		得點	打數	安打	犧打	盜壘	三振	四球	失策
4	內藤	一	二九	一	一	一	九	三	二
3	山田								
6	松村								
8	平井								
1	小國								
2	辻								
5	柴田								
9	山內								
7	中島								

三壘打　稻田　中村

二壘打　藤尾

對關高戰豫報

昨春極東オリンピック關西豫選鳴尾に於て擧行せらるゝや吾部も出場し劈頭關西學院高等部と干戈を交へしも不幸戰利あらず、豎子をして名を爲さしめた事は諸兄と共に未だ記憶に新たなる所である。爾後この敗衂に鞭撻されて不撓不拔、外、技を練り內、協和を計り絶えず雪辱の機を窺つて來た。遂に一星霜は過ぎた茲に

七月一日(土)午後三時　第一回戰
同　二日(日)午後二時　第二回戰
同　九日(日)午後二時　第三回戰

の三日をトし鳴尾原頭に於て雌雄を決する事になつた。新チームの價値は再三紹介せし所ではあるが先輩諸兄の熱心なる指導を得、昨年に劣らざるティーム

となつた。既に六月二十六日より會館に合宿練習を開始し黄昏咫尺を辨ぜざる頃迄砂に塗れ額に汗し猛練習を續け萬事遺漏無きを期して居る。

京大野球大會出場豫報

たとひ褪色したりと雖も權威のある京大野球大會の優勝旗を握つて居ると云ふ事は少なからず吾部に價値附ける一表象（シンボル）である。吾等は續いて之れを把持しなければならぬ。夏期休暇が迫つて來た。吾等の主眼とせる京大野球大會も後二旬日を出でない。先輩の眞摯なる努力の結晶たる此の榮譽を吾等が繼承する事を得るや——對關高戰の合宿練習より引續き選手一同は會館に起臥を共にし、臥薪嘗膽徐ろに兵を練つて居る、而して選手の意中には必ずや再び筒井が丘に此の優勝旗を飜さずんば止まずとの決意牢乎たるものがある。

一期日　七月十七日より六日間　於第三高等學校庭
一宿所　三條小橋東　龜屋旅館

陸上運動部

本一豫科一對神二中戰

新に丘に上りし人々より數多の精鋭を得、量に於て又質に於て充實せる我が本一豫科軍は、六月十八日扇港の覇者神二中を本校グラウンドに邀へて練習試合を擧行せり。終始接戰に接戰を重ねしが、我フィールドに於いて彼より一目の長あり。遂に五十對四十九にて勝つ。戰況左の如し。

△百米突（本校一、二中五五）
一等　土井　十一秒五分ノ四
二等　立原　三等　山本
△二百米突（二中四、本校二）
一等　土居　二十五秒
二等　屋山　三等　井上
△四百米突（二中四、本校二）
一等　土居　五十八秒五分ノ三
二等　森村　三等　井上
△八百米突（二中三、本校三）
一等　森村　二分二十秒五分ノ四
二等　天野　三等　溝口
△千五百米突（二中四、本校二）
一等　溝口　五分十五秒
二等　大西　三等　新内
△一萬米突（二中四、本校五）
一等　天野　四十三分三十秒
二等　丸茂　三等　新内
△ローハードル（二中三、本校三）
一等　山家　二等　岡寺　三等　增田
△ハイハードル（二中二、本校四）
一等　今里　鈴木　十九秒五分ノ一
二等　立原　野村
△鐵彈放射（二中零、本校六）
一等　難波　三十六呎十吋
二等　鈴木　三等　西川
△圓盤拋（二中三、本校三）
一等　難波　八十八呎三吋
二等　藤田　三等　增田
△槍投（二中二、本校四）
一等　伊吹　百三十三呎八吋
二等　藤田　三等　鈴木
△走幅跳（二中二、本校四）
一等　今里　十七呎十一吋五
二等　立田　三等　難波
△走高跳（二中四、本校二）
一等　上田　五尺四寸
二等　今里　三等　岡本
△棒高飛（二中一、本校五）
一等　山道　八尺六寸
二等　鈴木　三等　增田
△ホップステップエンドジャンプ（二中二、本校四）
一等　今里　三十八呎二吋
二等　上田　三等　難波

豫科生歡迎小會

六月十二日石屋川往復五哩マラソンを、同十五日短距離小會を擧行せり。隱れたる奪駿夫、近時靈出せる御影會の番外參加等あり、仲々盛大なりき。重なる記錄左の如し。

△マラソン
一等　天野　三十二分
二等　大西　三等　中山
△五十米突
一等　西川　六秒五分ノ一
△百米突
一等　西川　十二秒　二等　北川
△四百米突
一等　中村　一分　二等　篠島
△半哩リレー　一分五十秒
一等　二部組（安江、長濱、芝、西川）

最後の半哩リレーは豫科一部、二部、御影會の三組にて行はれ初めは大接戰を演ぜしも御影會の三番四番殊に弱く、一部組も亦意氣揚らずして遂に凱歌は二部組の上に高く上りぬ。

蹴球部

六月十三日本校校庭に於て豫科對二中のア式試合を行ふ。豫科優勢にして常に敵を壓し此の日大賀の當りよく三點を入れて豫科勝つ。

六月十八日午前十時より本校校庭に池田蹴籠と戰ふフォワードの連絡よく前半に五點を得、後半二點を入れ、敵軍コーナーキックを以て一點を入れ終り七對一にて易々として勝つ。

六月二十日晝食時間に於て豫科對御影會と戰ふ。豫科終始壓迫せしも入らず。御影會は足も手も用ふる手段もありていと面白き試合なりき。兩軍得點なく無勝負に終る。

六月二十二日晝食時間中に本二豫科と戰ふ。本二メンバー揃はず練習不足の爲めか一對零にて豫科の勝利に歸す。豫科軍の技の上達せるに驚く。

六月二十四日本校校庭にて本校對二中と戰ふ。此の日前衛のバス物凄くハーフタイム迄に八點を入る。後半又もや三點を入れ合計十一對零にて本校易々として勝つ。ゴールキーパーノータッチの試合なり。大賀、齋藤の益々有望なるを喜ぶ。

メンバー左の如し、

（本校）
杉　G
平吉　RF
豐越　LF
中　RH
伴　CH
溝山　LH
清　RF
大　IF
木　CF
張　IF
齋　LF
田林保田後山　日中水賀　藤

（二）
淵　田　柿　杉　伴　田　清　佐　芝　藤
保　本　村　本　藤　好　田
生　豐　久　中　中　小　井　奥　山　田

（御影）
田駒田保山川　桑村田周村
橋神宮豐山中田　廣渡平大齋

（豫科）
本崎田馬中村村　邊野賀藤

音樂部

音樂會だより

音樂と云ふ形式の下に慰められんとする人々、樂まんとする人々が集つて初夏の一夜を樂しく過したいとはずつと以前からの希望であつた。

時は六月二十四日。場所は本校講堂で例年の語學大會にも劣らぬ盛況であつた。此の度は特に同好の方々から御批判なり御指導なりを仰いで技術の練磨なり部の發展をはかりたいと云ふ趣旨から特に招待券制度で公開する事とせられたのである。

ヴァイオリン、ピアノの方々にも種々出演をお願ひしたが種々の事情で其の意を得ずたゝ内山君のヴァイオリンソロのみであつた事が一部の人々にとつては非常な淋しさと變化なきを感ぜしめた。そして殆どマンドリンとグリーのみの音樂會の樣な形になつてしまつた事は一同の遺憾とする所であつた。

プログラム

第一部

一、マンドリン合奏……マンドリンクラブ　序曲　リブランヂ
二、男聲合唱……グリークラブ　エルシイの鐘　リエツケル　戰の歌　モリス
三、マンドラ獨奏……鳥越三千夫　貴皆　武井守成
四、男聲合唱　舞を捧げよ　グリークラブ　二つの薔薇　タウナー　ウエルネル
五、マンドリン獨奏……南　憧憬　第一タランテラ　ラスカラ
六、男聲合唱……グリークラブ　私の愛らしきカザリンよ　クラウチ　ポートソンケ　クラーツ

第二部

一、マンドリン合奏……マンドリンクラブ　幻想齒リゴレット　ヴエルディ
二、上飯宮獨唱……山上　松藏　村の眞晝　トーマス　歎劇アッチラの一節　ヴエルディ
三、マンドリン四重奏……マンドリンクラブ　第一變奏狂奏曲　アリエソン
四、ヴァイオリン獨奏……内山　英一　ノクターン　ヨハン
五、男聲合唱……グリークラブ　邂逅　クロイツエル　默禱　モツアート
六、マンドリン合奏……マンドリンクラブ　西班牙狂想曲　ケルベツチ

第一部のマンドラ獨奏は武井守成氏の作品で此の春三月頃に發表されたもの我邦唯一のマンドラ獨奏曲で

ある。

兎に角此の種の會としては今迄に見ない聽衆と部員一同の眞面目な出演によつて相當の成功裡に終了をつげた。今後も止まざる熱心さを以つて以上の進歩をはかり氣持のいゝ會合を開いて眞面目な方々に聞いて頂き度いと云ふのが一同の希望であつた。

終りに臨み此の會に付き深き了解を以つて種々御援助下さつた小川先生並に當日色々御手傳ひに預りました語學部の方々に對して深謝致します。（若林記）

◎事務

一般民商事就中海上保險、運送其他海事及海外事件の訴訟、鑑定、仲裁、助言並に海員審判所に於ける審判事件の補佐等

神戸市三宮町一丁目五五（三宮警察署向）
神戸信託ビルディング二階
辯護士 法學士 吉田精三法律事務所
電話三宮二四〇九番
住所 葺合町一七二一番屋敷ノ一六三
電話三宮五六四六番

拜啓初夏之候愈〻御清適奉賀候陳者今般小生等例年通左記方面に夏期海外旅行可致決定致候就いては貴地方に立寄申候節は御多忙中恐入候へ共何分の御便宜相願度乍略儀藉誌上奉懇願候　敬具

大正十一年七月

蘭領印度方面　林　正治
　　下里巳之助
臺灣南支マニラ方面　長谷川　彰
　　槇本　政一
　　森　瑛
中部及北部支那方面　土居　榮介
　　川越三子夫
　　岡田　新三
朝鮮滿洲方面　石光　憲
　　高橋　明

在外卒業生各位

學校記事

學校日誌

○六月十日　神戸市立第二神港商業學校教諭三枝祐龍本校助教授に任せらる（擔任體操科）

○六月十四日　小田貞に雇を命ず（研究所勤務）

○六月二十一日　教授小久保定之助に京都、愛知、岐阜、滋賀一府三縣へ出張を命ず

○六月二十六日　六月十九日付を以て左記の通り官等陞叙

陞叙高等官四等　教授　榊原　叔雄
陞叙高等官五等　教授　竹原　常太
陞叙高等官五等　教授　内多　精一

○六月二十九日　左記本科第三年生十名に對し本年夏期休業中各頭書の地方へ修學旅行を命ず

朝鮮、滿洲、北部支那　高橋　明　石光　憲
中部支那　土居　榮介　岡田　新三　川越三子夫
比律賓、南部支那　槇本　政一　森瑛　長谷川　彰
蘭領印度　林　正治　下里巳之助

同窓會

（本部　神戸高等商業學校内）
（電話（三宮）七三七番）
（振替口座　大阪四七八〇番）

び母校の爲め日々活動罷在候間乍覃御安意被下度候先は不取敢御報告まで　匆々

（一九二二年五月下旬　大川生）

同窓會記事

濠洲だより

拜啓先般來内地及び英國本場より會員の來濠を見且つ今般卜部氏の一時歸朝に際し歡迎送別を兼ね例のキング、ストリートのパリスハウスにて久々振りに同窓會を催し晩秋の一夜を愉快に語り暮申候出席者は

卜部（三井物産）　片桐（兼松商店）
戸田（大澤商會）　内海（三井物産）
中田（三井物産）　谷口（兼松商店）
米田（山下汽船）　永井（日本毛織）
綱谷（兼松商店）　大川（三井物産）

の連中にて當地の同窓を追々增加致し賑かに御座候尤も鈴木の田井氏は目下メルボルンに滯在中にて列席致されざりしは殘念に御座候

尙ほ會員一同揃つて頗る健全、母國及員の三人に代つて會の將來に對する希望と抱負を述べる。

序に消費組合から歸つて來る筈の基金の處分法について相談する。

「碁盤でも買つて學生會館へ備へとくとしやうぢやないか。」

「碁盤ぢやその恩惠に浴する者が極めて小數だ。學生文庫へ寄附してやればもつと大勢の者が喜ぶよ。」

「それぢや控室へ時計でもかけるとするか。最も利用の普遍的なるものだ。」

「しかし年柄年中一つ所ばかり指してゐるのは見よいものぢやないよ。木犀の香りに包まれた正面の丸時計ぢやないがれ。」

「やつぱり記念樹でも植えるのが一番いゝ。平凡なやうだが。」

「いつそ何もせずに金のまゝ殘して置いて何かの費用に充てるとしやうか。」

「面倒臭い。消費組合へ寄附しちまへ。」

まるでセノアの經濟會議だ。

「それぢや斯うしやうぢやないか。半分消費組合へ寄附して半分皆んなで菜菓子を喰ふと。」

誰かゞ興太を飛ばす。

が結局記念樹を植えるといふ事に衆議一決。樹種もなるたけ生長力の旺盛な風趣の豐かなものをと銀杏を選ぶ。商大轉校者の母校へ殘す記念物としてこれより好個のものはおそらくあるまい。

僅かの金で碌な樹も買へないだらうと氣づかふ連中もあつたが、今こそ淋しく小さくて哀れだが、十年二十年五十年百年の後には隨分立派な亭々とした大木になるだらうといふ遠大な理想主義が最後に勝を占めたといふわけだ。希望に生きる若者の面目がこゝらに躍

銀杏を植える

——申酉倶樂部便り——

（大正十年商大轉校者）

五月二十六日、午休みの時間に學生集會所で委員改選のための會合を催す。集まる者多數。

「久し振りでこんなに纏つたんだ。今日は一つ茶話會といふ事にしやうぢやないか。

城が氣の利いた提案をする。

「よからう。」

「賛成。」

可なり多數の共鳴者が出た。が中には午後の時間を控へて集つてゐる者もあるといふので、この話はそのまゝお流れとなる。

委員の改選をやる。

松村と藤淼と林の三人が當選した。

三浦がもとの委員を代表して挨拶をし、松村が新委

如として踊つてゐる。
あのガッシリした赤煉瓦の大講堂の側にその尖塔よりも尚ほ高い銀杏の大木があるのだ。
冬が來た。
木枯が吹く。
散る散る。
なつかしい扇型の黄金の落ち葉が大講堂の屋根に積り樋に止まり窓を釘ちしてそこら一面に散り敷く。
今年も散つた。
來年も散つた。
來々年もそのまた來年も。
わがかたみの銀杏の二たもとはかくして永久に思ひ出の建物を飾り庭を飾る。
いとげなき頃の思ひ出の甘きに涙を流す事を知る若者たちよ。二昔三昔後の世に再び彼の丘上に立つて往時を追想する時のよろこばしさなつかしさかなしさを想へ。若しそこに蕭々空を摩する銀杏の蔭るがあつたならそれこそわれらが母校へ殘せし唯一つのかたみなりと知れ。
最後に田中が立つて、
「此の間ある所で蒲池と會つた。商大の連中と在京の卒業生（大正十一年度の）と連絡して何かやらうぢやないかといふ事だつた。自分もおもしろいと思ふ。委員に於て其の運びをせられたい。」
と述べた。
固より一同好む所だ。間もなく在京の「一九二二クラス」の愉快な會が生れるだらう。
三時頃會を終る。（K、F、）

在神中第十二回生の會

丘を去つてから足掛け五年にもなる。洋服の裏返しも利かなくなつた。其の間に沈香も焚かず屁も放らぬ手合も多いが又世界を股に活躍した偉者も尠くない。
先頃寺田が紐育から八家が倫敦から夫々芽出度歸朝した。井關は小樽から元の古巣へ歸り三上に納つた。揃ひも揃つて海の人々。
之等の新人を中心に去年の暮以來開かなかつたクラス會を久し振りに六月二日の夜、長狹通りの菊水樓で開いた。集る者
寺田、井關、青木、阿部、福田、小林北里、川島、南、西村（二）大崎、澤田代喜、齋藤（松）山中、濱
の十六名。八家が鼻の手術で來なかつたのは殘念だつた。實は新歸朝者の歐米經濟事情を拜聽せうと思つたが浴衣姿にはちと暑過ぎる肉をつゝいては歸朝談處の騒ぎでない。有妻と獨身の區別や子供の數の詮議に時は移り兎角話は隆して行く許り。會の名も何とか命名して規則的に開かうと相談をして見てもそんな七面倒臭いことは抜きにせよと一向話にならず只喧々囂々友の噂に昔を偲び今を語り九時頃散會した。
尚ほクラス會毎に始終骨折つて呉れた森田の遠さんの北海道に移る前に此の會を開かうと思つたが色々の都合で其の機を得ず、此の夜遠に君の健康と壽來を祝した事を報じて君に謝意を表して置く。
（文記）

播州在住者同窓會

大正十一年五月二十一日播州在住者（加古川以西）同窓會を姫路に開く會する者左の如し

3 北野　祐信君　5 山口　次郎君
7 上田耕一郎君　7 泉　滿夫君　11 下間　文雄君　6 福島　光源君
13 加藤　敬治君　15 鹿田　鳥作君　15 宛木　武夫君
15 廣瀬美惠次君　15 中西　定藏君　15 田中　一郎君
15 羽岡　種光君　特別 竹内保夫先生

先づ會場に水島先生の美事なる書幅の懸けられたるは同先生を記念する爲めなりと知られたり（竹内先生の愛藏品）偶々北野君は德島へ榮轉に付自然に送別會を兼ぬる狀態となりたり同君在任中は後進者誘掖に努められたるは大に感謝する處なり山口君は近來園藝に熱中し五十餘種の蔬菜を培養せられ意氣大に高ふして鄕里に在りて村夫子を以て自任し居らると云ふ泉君は北野君の後任なり上田、窪田

兩君は加古川毛織にて活躍中下田君は高砂三菱製紙に在りて獨り天下の由加藤君は姫路商校の先生として目下は餘程貫目を揚げられたり廣瀬、中西、羽岡、田中、荒木の諸氏は國家の干城として目下勤務中なり特別會員たる竹内先生は吾々同窓生の潑溂として元氣に充ちたる狀態を目擊せられて如何にも嬉しさうに高談雄辯を續け居られたり此の日竹内先生御秘藏の書畫刀劍類十數點を展覽せしめられたるは會員一同の大に感謝する處なり開宴中は相變らず昔の學生時代に若還りて縱談横議無邪氣なる事天下一品實に水入らずの會合程神聖にして且つ愉快なるものはあらざるべし開宴後は圍碁黨盛んに勃興して御大竹内先生の景氣良きに引換北野廣瀬等諸君の旗色揚らざる樣見受られたり毎歲一度此會を開くことを議決し終日快樂を盡して午後五時散會せり此の日竹内先生の奥樣には終始座間の周旋奔走の勞を採られしは是又大に感謝する處なり。（福島生）
會場は福島君假住の大廣間を拜借せり新築にして景色良く雅遊に適せり同君は現今姫路毛絲の事務長として最得意の時代なるが如し本會を開くに當りても福島君等御夫婦にて大に斡旋盡力せられしは予が滿腔の誠意を以て感謝の意を表する次第なり。（竹内樟南附記）

故大西猪之介君を憶ふ

服部春一

一月以來中耳炎で入院し大手術を受けた僕は、痛みの漸く薄ぐにつれ、無聊の苦しみに堪へず遂に醫者の禁を破つて、密かに夕刊を買ひ取らしたが偶然にもそれが僕の敬愛する大西猪之介君の訃音を載せてゐた。僕は此の時或る强烈なるショックを受けた、そして手から新聞を落すなり、轉げるやうに寢臺の中へ横になり其の儘暫らくは茫然としてゐた、やがて種々雜多な感じやら思ひ出が雲のやうに浮んで來て取り止めやうもなかつたが、兎に角大西君は二三年前結婚せられたと聞いてゐる、或はもう愛兒も出來てゐるかも知れぬ御兩親の内何れかは恐らく生存して居られるであらうそれら總てを殘してあの北國で此の世を去られたとは何たる悲慘であらう、洵に氣の毒に堪へない又學界から觀ても痛惜せざるを得ない、日本で屈指の學者で而も尚ほ將來ある少壯學者を突然亡くしたことは我幼稚な經濟學界の一大損失で遺憾至極のことである。僕はフト自分が數日前生死の境の彷徨から生き甲斐のない一命を取り止めたことに思ひ及んだとき、「然し大西君は一體何の病氣で死んだのであらう？」と考へたが、僕は卽坐にそれを獨りきめにきめてしまつた。あゝ此の寒さ近年にない此の寒さは北の國ではどんなに堪へ難かつたであらう、そして今日迄數年間其の氣候に馴れてゐた同君も遂に胸の病氣のために此の冬が越せなかつたのだと。けれど僕の此の想像は間違つてゐた。數日後に到着した上野福三郎君の書面によると、それは全く腸チブスで設備不完全と手當不行屆のためであつたらしい。僕が其の夜上野君に手紙を出して大西君の其の後の活動振りと臨終の模樣とを詳しく會報に報告するやう頼んだが、それに對する同君の返事は左の通りである。

（前略）扨大西君の逝去は意外の事にて、御同樣痛惜に不堪候、同君には橋本博介君の紹介にて迎妻家庭頗る圓滿、丁度舊臘初誕生の息女さへあつて頗る幸福なる生活をなし其れが爲め近頃は餘程熱して社會的活動も愈〻是からと齊しく期待致居候折柄今回の不幸遺憾至極に御座候、丁度舊臘來正月にかけ上京、伊豆伊東に遊び一月中旬歸樽致し日々學校に出で居候由なるも食慾餘り進まず二十五日に至り高熱を發し醫師の診斷を受けたるに時節柄とて流感の手當を受け居りしに熱一向降らず。二十八日血液檢査、三十日に腸チブスと決定、當小樽には普通病院に隔離室の設備無之候爲め翌一日傳染病院に移され老母看護の下に療養され候。二十四日同君小生を訪問し呉れ候由なるも小生旅行中にて會はず、二十六日學生より、感冒にて二十五日より引籠中なる旨漏きしも時節柄とて大した事もなしと考へ居りしに本月二日新聞に傳染病院に送られし旨の記事を見て驚き其の事實を確め又主治醫に電話にて容態を尋ねしに前記の次第にて普通の腸チブスに付今暫らく異變なければ大丈夫なりとの言に有之。病院遠隔の地なる爲め直に訪ぬる事能はず。五日日曜には訪ぬる考なりしに當日早朝より來客ありて終日潰され終に九日國葬の休日に尋ぬる考にて六日留守宅に容態を聞かせしに、熱の下らざるに困り居るとの事、然し時日

も相當經過せし事にてあり。又近頃チブスの大部分は恢復するものに付左程六簡敷ことも考へ居らざりしに八日夜半突如病院より電話訃音を傳へ驚愕致候次第に候、八日午前中は令夫人も尋ねられ熱下降の氣味ありし故大に喜び歸退せられし由なるに同日午後二時半頃より俄かに腸出血をなして容態急變終に同夜十時二十分永眠の由に候。本人も死なる考は少しも無之樣子にて何れも全く意外の事、後にて考ふれば遺憾の點少なからず。アタラ此の英才を臥床僅かに二週日を以て病魔の奪ふ處と致候段返すがへすも殘念に候、後事に就ては橋本君と相談、出來る丈けの世話致度存居候。

尚葬儀は本十二日當地天上寺にて行ひ學校側よりは教職員並に學生全部參列頗る多數の會葬者有之候、神戸高商同窓會小樽支部よりも三橋君弔詞を讀み又花輪等贈り候。

右不取敢貴酬旁事情御報迄、尚同窓其他知人へは御序の節可然御傳へ被下度候(下略)。

僕は大西君とは入學より專攻部卒業迄六年間學業を共にしたが多少懇意であつたのみで、特に親しく交際した譯ではない。然し僕が若し今回罹つた中耳炎の手術の時機を失してゐたなら、大西君と略日を前後して命を失ふたかも知れぬといふ生死の眞近い距離を往來して來た印象深い經驗から、敢て僅かながら大西君を追憶し茲に報告して見たいと決心したのである。

顧れば我等が神戸の高商(當時は簡臺とはいはなかつた)に入學したのは明治三十八年の四月であつた。入學後一二箇月で病氣のため休學してゐた大西君は、何でも九月の第二學期から出席するやうになつたと記憶する。或日僕は大西君に「君大分永いこと休んでゐたな、どの位痩せたか體が量つてやらう」といふて同君を横合から抱き上げかけたら同君は「おい勘忍して吳れ。俺は肋骨が一本惡いんだから」と逃げたので僕は此の時あゝ惡い事をしかけたと思ふたが、同君は胸部の病氣のため當時既に一人前の健康體ではなかつたので仲々勉强した。

岡田實麿といふ。今一高の教授をしてゐる英語の先生に、ホーソーンのマスターピーセズを教はつてゐたが、其の中でアンビシヤス、ゲストといふ一章があつた。其の章の濟んだ後に岡田先生は大西君に「あなたの文章は甚だ面白く拜讀しました、難有茲にお返しします」といふて何かフールスキヤップ二三枚出して机の上へ置かれたが、後で聞くと、それは大西君が其の一章に就て感じたことを書き連ねて先生に見て貰つたものであることが分つた。當時語學の科目は只解釋するのが關の山で之れを文學として十分味ふだけの頭を持つてゐたものは非常に稀であつたと思ふ。

同君は京都商業學校時代から基督教信者であつたが前記の大病に罹つてからは更に信仰が深くなつたものらしい。或る秋の朗らかな日曜の朝、諏訪山附近の山頂で數人が集まつたとき、數番の月並な祈禱の後で大西君の捧げた祈りは、今でもまだ僕の眼の前に彷彿としてゐる。同君は瀕死の重患を治癒して貰つた神の惠みに對し、火のやうな熱心をこめて感謝の祈禱をしたのだが。當時ほんの求道者に過ぎなかつた僕の胸にもそれが牧師の陳腐な說教や祈禱よりも遙かに强く響いた。僕は後で同君に「君はそんなに基督教に熱心であるのにそれを何故人に勸めないのか」と問ふたら同君は「僕は此の頃は勸めることはしない、自分のためで十分だから」と答へたと記憶する。

本科一年以後は大西君は講演部で獨特の色彩を現した。最負目ではないが、日調の揶揄なり、嘲笑なりが幾分過ぎる厭味はあつたとはいへ、當時の講演會では同君の演說が際立つてよかつた。本二、本三になつてからも、よく聯合演說會などで他校へ出掛けることがあつたが、いつも其の技倆に於て亦其の內容に於て同君の演說は一歩他に勝つてゐたことは既に一般の定評であつた。

本科二年以後の同君は津村先生の商業政策の講義に感激して一意經濟政策の研究に沒頭した。これ同君が津村先生をいつまでも師と仰いでゐた譯で、有名な帝國主義論の中でも明らかに、津村教授の講義によつて始めて日本國民としての自覺を得たと書いてゐる。以後同君の勉强はます〳〵激しく、いつも圖書館閱覽室の東北の隅に席を占め、十分間の休みの間でも此處で讀書してゐた、放課後は夕方迄ずつと必ず圖書館で過してゐた。眠氣を催すと其の儘ぐう〳〵眠つてしまふが、何分堅い机のことゝて二三十分すると腕が痺れて來て、自然と眼を醒ますといふ風であつた。要するに本二から本三へかけては、讀んで〳〵讀みまくつたもので其の結果は卒業論文の帝國主義論である。

專攻部へ入つてからは同君は關博士指導の下で引續き帝國主義論を研究してゐたが遂に在學中これを公にした。當時の新聞紙や雜誌は擧つて其の出來榮えを賞賛した程で、恐らく今日迄此の種の研究で嚆矢の有に出づるものはあるまい。(只關博士のみは國民經濟の綱介欄で「遂にイズムの功過を疑ふ」と迄酷評されたが)。後同君は社會主義の研究に方面を變へられた、そして專攻部の卒業論文はゾムバルトの無產者階級論であつた。

專攻部在學中の同君は屢々國民經濟の雜錄欄に筆を執つた餘り名前が頻繁に出るので遂に小西虎雄といふノンドプリームで投稿したこともあつた。國民經濟に

矢鶴に長い續稿を寄せて讀者を厭がらした傳を作つたのは或は同君であつたかも知れぬ。

東京高商の卒業式には同君は專攻部卒業者を代表して答辭を讀んだ。何でもモムゼンの或る文句を引出して來て極めて簡單に要領を得たものであつたが、斯の如きは從來なかつたことで一新例を開いたものと謂ふことが出來る。

卒業後は直ぐ小樽高商へ赴任し大正二年には留學した。其の時僕は同君から簡單な端書を貰つた。それには「牛製品を輸出し、完成品となつて再輸入する、ごと機嫌やう」と書いてあつた。謂ふまでもなく因はれたる經濟學を脫稿したから次には放たれたる經濟學を攝まへて歸つて來るとの意に外ならぬのである。

留學中は何處で一番餘計に勉强したか僕は知らぬが戰爭勃發當時伯林で勉强してゐた同君は命からゞ〳〵英國へ逃れ得た危い話は關博士の斡旋で大阪毎日に揭載されたと記憶する。倫敦へ渡つては戰時英國の勞働問題の眞相を一流の筆法を以て明快に國民經濟に報告してゐたのも亦吾人の記憶に新である。後佛蘭西へ行つて佛蘭西語を仕上げ、次にゲーテにあやかつて伊太利に旅し、そこで六箇月も暮し、若い哲學者振つてパンタレオニやクローツエを訪問した處など同學中類のないことである。

歸朝後は「伊太利亞の旅」と「因はれたる經濟學」とを著して一氣に學界に雷名を轟した。同君は恐らく經濟哲學では左右田博士を目當としてゐたのかも知れぬが國民經濟で同博士に簡單にやつてのけられたので、ます〳〵哲學の深さを感じたことであらう。

二月末退院した僕は、猶自宅で引續き療養してゐたが當時何處から飛んで來たのか一羽の鶯が毎朝目の醒める頃前庭に訪れて來て暫時の間美聲を弄するのであつた。僕はいつも病氣の苦惱を忘れて鶯に聞きとれてゐたが、それが飛び去つたあとは何だかきまつて大西君のことを追想した。丁度其の頃であつた、大阪毎日のフエイエトンに大西猪之介遺稿として婦人問題の將來とかいふ題の寄書が出た。僕は大西君が再生して眼前に現はれたかの感がした。プラトーンや女大學を引證して婦人を奴隸に比較するあたり讀者に深い興味を與へたに相違なく、僕は嘗て森戸辰男氏のクロポトキン學說を借りて讀んだ時のやうに實に痛快を感じた。翌日も亦過へるものと期待してゐたが一向續稿は見當らぬ、其の翌日になつても亦出ぬ。よく見ると隅の方に其の筋の命により揭載を中止するとの社告があつた矢張り君は再現せないのだ。

四月初めの大阪朝日週刊に一平氏旅行留守中の擔當者伊東忠太氏の漫畫が出た。當冬の獲物と題して此の冬の死亡者山縣公大隈侯其の他社會各方面の代表的人物三四十名が載せてある。大西君も出てゐる。幽界人事消息を讀んで行くと僕等の學校の先生は居ないかいといふ子鬼の間に對して「親鬼は居るとも岡松參太郎や大西猪之介といふのは大先生だ、……」と答へてゐる處痛快を通り越してゐる。漫畫とはいへ、大西君が伊東博士の筆で朝日紙上で紹介せられ、山縣公や大隈侯と同道で、而も一世の法學者岡松博士と肩を竝べて永眠せられたことは、君も亦以て瞑すべきで、僕と雖も最早遺憾はないと思ふた、これ以來僕の頭には大西君は本當に死んで歸らぬものとなつてしまつた。

四月になつて、あちらこちらの櫻が咲き始めると大西君の鶯もいつのまにかさつぱり來なくなつた。その中に僕の病氣もだん〳〵癒つて來てちよい〳〵散歩も出來仕事の方にも頭を使ふやうになるとともに、大西君の事もだん〳〵忘れるやうになつた。

同窓生中大西君と懇意にしてゐたものは僕の知る範圍では、京都時代からの友人である上野福三郎君と奥田惠郎君及び結婚媒介者である橋本博介君は別として文學及び講演部等趣味の上では岡信吉君が隨一ではあるまいか。近來減切り評判が耳く黑人をも凌ぐといふ岡君の水彩畫を大西君は知らずに死んでしまつたことであらう。それから專攻部時代で研究の關係上同君は增井光藏君とも仲が良かつたらしい。今度病氣を拾ふたといふ伊豆の伊東へは在學中の冬期休暇を利用して增井君と一緒に遊びに行つた話も聞いた覺えがある。增井君が今や推しも推されもせぬ立派な學者に爲り遂げたのも多少大西君の友情的刺戟に關係する所があるのではなからうか。投機界言論の雄である丹羽豐君も交際の廣い關係から大西君とは隔てのない知己であるまた日本一の硫黃通吉田長祥君は北海道の硫黃山を巡視せられる度毎に大西君を訪問せられたとのことである。それから飯島幡司君も少なからず懇意にして居られたことは勿論である。僕は前記四君とは最近簡單な面會なり電話なりで大西君の事を話したことはあるが阪神を去つた岡君とは其の後一回も遇はない、一夜しんみりと大西君を中心として昔を追想して見たいと思ふ。(大正一一、六、一八)

故大西猪之助氏記念文庫

拜啓初夏之候益々御清適之段奉慶賀候

陳者故小樽高等商業學校教授大西猪之介君は明治四十二年神戸高等商業學校を卒業し尋いで東京高等商業學校專攻科に入り經濟學を專攻し同四十四年七月卒業直ちに小樽高等商業學校に職を奉じ大正二年歐米へ留學同六年八月歸朝せられ候爾

來夙夜黽勉斯學の研鑽に心を潜むると同時に一面育英の重任に當られ歲月と共に學殖益々深く新進の經濟學者として其の名聲愈々高まらんとするに際し今春湘南地方旅行中不幸にも病を獲られ歸來療養中の處二月末腸窒扶斯と確診極力醫療に努めしも藥石終に其の効なく去る二月八日午後十時長逝せられ候君の訃報一度傳はるや君を知るもの皆驚愕痛惜せざるものなき有樣にて君の一家一族の御悲歎は申迄もなく我學界の損失亦少なからざるもの有之候天君に壽を假さんか學界に敎育界に貢獻せられし所更に莫大なるべかりしに今此の不測の長逝を見るに至りしは御同樣寔に遺憾に不堪候爰に下名等相謀り君が公生活の始めにして且つ終りなる小樽高等商業學校に君の藏書約一千五百冊を基礎として同君の記念文庫を創設し永遠に篤學者として將た敎育者としての君の名聲を傳へ度と存候就ては左記の條項御諒承の上何卒相當の御援助被下度此段得貴意候　敬具

大正十一年六月　日

記

一、醵金額は一口金五圓とし各員二口以上のこと

二、締切は內地在住者の分は七月末日とし海外の分は九月末日のこと

三、醵金は小樽高等商業學校同窓會（振替小樽三〇〇一番）宛に拂込み又は集金郵便によること

四、醵金に對しては特別の場合の外如水會々報神戸高等商業學校及び小樽高等商業學校同窓會誌上に記載し領收の證に代ゆること

故大西教授記念文庫設立發起人

（イロハ順○印は實行委員）

糸魚川祐三郎　伊藤　祐
猪股　孫八　服部　春一
○橋本　博介　丹羽　豐
堀內　泰吉　堀　光龜
富永　政一　富盛　利作
岡　信吉　大平　精
奥田　惠郎　大熊　信行
大宮　五郎　渡邊　龍聖
和田　周策　加藤　良藏
川上　久辰　吉田　長祥
高垣寅次郎　高島佐一郎
田中藤一郎　屬中　寛治
○武田　英一　武田　秀雄
辻　喜三太　根岸　正一
中村和之雄　村田　午郎
村住　英一　上田貞次郎
內池　廉吉　內山　正七
栗林　德一　山本　厚三
松井　實　○松田　新
增井　光藏　○藤田　清
出光　佐三　相澤豐太郎
阿部　泰作　新井豐太郎
佐藤　滿　佐原　貴臣
坂本　越男　坂本　陶一
佐野　森藏　佐野　善作
北尾伊三郎　岸　二十五
三橋　行雄　水戸部敬一郎
三潟　良次　三浦　新七
飯島　幡司
市川　靜雄
○伊　房次郎
○西尾　清一
富樫長次郎
○岡本　幹輔
大野　純一
大澤　渚
渡邊　精一
加地　功
高橋　徹男
田邊　貞造
田中　正一
津村　秀松
永井　伊助
村田　助一
○上野福三郎
野村　豐治
八木庚之助
松坂啓太郎
郡　菊之助
○阿部　芳治
淺沼　汪水
坂西　由藏
左右田喜一郎
佐々木謙吉
湯本　矯夫
三田村俊雄

宮崎　力藏　水島　鐵也
關　一　鈴木　二郎枝　椎名幾三郎

大阪凌霜午餐會記事

！本會は凌霜倶樂部大阪土曜會と稱す！

！本會の例會日は毎週土曜日（正午）とす！

！本會の例會は東區唐物町三丁目加島旅館三階食堂に於て之を開く！

かく改めて書いても新規に湧き出た會でない、歷とした由緒あり光輝ある歷史と沿革とを有する會である。この會に去る六月二十四日（土）國島先生が出席せられた、あまり少數であたので電話で慌して漸く十名の出席者を得た——いつもかうでもない特にこの日は此の樣な廻り合せになつたのではあるが——四百數十名の同窓を有する大阪としては比較窮奮はないとは校長の話。

時々出席される方は努めてまた出席されない方は午餐名簿登錄といふ意味でも御出席を祈る（筆者大阪の午餐會にはまだ登錄がしてないので從つて模樣も知悉せず爲めにもの是らぬ書き方になりし事を陳謝す、永安生）

凌霜倶樂部記事

月二回の午餐會會毎に發送する案內狀の數には變りがないが、出席會員數には變りがある顏觸れの少數にも變りがある二者の中一は變りのないのが常態一は變りのあるのが常態、これ蓋し理論上當然と心得て五月號六月號共に紙上に記事の登載をしなかつた——實は事務繁忙で出來なかつた——爲めかどうか——原因目下取調中——兎に角左表の通り會毎に人數が逓減してくる。

第一火曜		第二火曜	
三月	二七人	二月	二九人
四月	一四人	一月	一八人
五月	一五人	一月	一五人
六月	一三人	一月	一五人

暑くとも寒くとも案內狀は百通版で押して機械的に宛名を書いて發送するので外部的には何の勞苦もないやうであるが「見れば只だ何の苦もなき水禽の足にひまなき我思ひかな」の感はある。

他の事は行き屆かなくとも會場の夏向の設備と料理の涼味とは相當に考慮してあるつもりですそれから何時も校長初め諸先生毎會四五名づゝ出席されてをりますし次回から一層奮つて出席せらるゝ事を祈る。（六月二十六日　永安記）

會員動靜

A の部

●荒木康三郎君（一一）　轉居・大阪府東成郡住吉村字天地堂二七四ノ四、

E の部

●榎並　喬一君（一四）　就職・東京市麴町區錢瓶町一番地株式會社日本興業銀行　●（現住）東京市本郷區駒込追分町八三、昇榮館

F の部

●福井　慶三君（一六）　轉任・c/o The Japan Cotton Trading Co., Ltd., Carlton Building, Outram Road Fort Bombay.

●藤原　藤造君（六）　轉居・東京市外目白上り屋敷三五五九、

●二見　松三君（八）　轉任・東京市丸ノ內久原商事株式會社東京本店詰　●（現住）東京市牛込區矢來町八番地九號

●二木孝四郎君（二）　轉任・吳市住友銀行吳支店

●（現住）吳市稻荷町四ノ一一、

●藤吉　紫溟君（一六）　野上工業所辭職・（現住）神戸市上筒井通一丁目二七、渡邊方

G の部

●後藤　近君（二）　病氣の爲め三井鑛山會社を昨年九月退社・大正十一年五月より神戸市立第一神港商業學校敎諭に就職

H の部

●日高爲三郎君（一四）　就職・滿鐵京城管理局經理課

●堀口　菊藏君（一三）　轉任・名古屋市西區下園町鈴木商店名古屋支店

●本城　竹松君（一五）　轉任・大阪市南區日本橋筋一丁目住友銀行日本橋支店

I の部

●一色　友正君（一二）　轉居・東京市小石川區若荷谷町五六、

●入江　信夫君（一四）　轉勤・大阪府泉南郡佐野町驛前入江組運送支店氣付

K の部

●香川義太郎君（一四）　三月三十一日甲種勤務演習滿期退營すべき筈の處病氣の爲め岡山衛戍病院に入院四月二十一日退院、目下鄕里に於て靜養中（香川縣仲多度郡榎井村六七三、

●金井　治平君（六）　廣下汽船鑛業株式會社橫濱支店、事務所左記へ移轉、（橫濱市花咲町二ノ二一）

●本平　信美君（一三）　和泉織布株式會社客年解散し關西紡績株式會社其の事業を繼承したるに依り同社に轉勤但し目下病氣之爲め靜養中　●（現住）京都市下鴨松木町十、

●小池三次郎君（三）　シドニー兼松商店へ轉任・六月十三日郵船丹後丸便乘船任、c/o F. Kanemasu Ltd., 8 O'connell St., Sydney.

●桑原佐千男君（一三）　小津武林企業會社辭職・

●（現住）武庫郡住吉村五八七、近藤方

●黑岩寅喜代君（一四）　轉任・久原商事大阪支店詰

●岸田　清淑君（一五）　六月一日より大阪步兵第八聯隊第三中隊へ編入せらる

●楠本郁之助君(九)　轉居・大阪府泉北郡濱寺公園内一〇五、

●龜山　孝平君(一五)　七月二十七日神戸出帆榛名丸にて東洋棉花孟買支店へ赴任 c/o The Oriental Cotton Trading Co., Ltd., Dwarkadas Building, No. 192, Hornby Road, Fort Bombay.

●河部　宏君(一〇)　轉任・從來勤務中の山一汽船會社神戸支店閉鎖に付退職更に御影町灘商業銀行に就職 ●(現住)　從前の通り

Mの部

●升形　廣吾君(一四)　就職・和歌山市木挽丁八番地糸川商事株式會社

●松尾　源助君(二)　轉任・朝鮮銀行木浦支店

●三田村　明君(二二)　海外出張中の處今般歸朝 ●(勤務先)　東京市丸ノ内久原鑛業株式會社本社調査課 ●(現住)　東京市牛込區早稲田南町二番地

●三根　忠作君(二一)　就職・大阪市東區北濱一丁目、株式會社野村商店北濱出張所西橋本貿作商店

●水谷　武夫君(二一)　轉任・ c/o Messrs. Suzuki & Co., Hongkong

●森　正樹君(一六)　現住・京都市上京區七本松通出水上ル正覺寺門

●森本　實君(一〇)　轉任・鈴木商店本店詰・(現住)神戸市菊水町七丁目二四、

Nの部

●長尾　鶴壽二君(一三)　就職・廣島縣蘆品郡戸手村農學農業學校教諭

●長澤周一郎君(一四)　轉任・大阪市東區壽屋橋三丁目一、東洋綿花株式會社

●中井　一郎君(一五)　事務所移轉・神戸市榮町二丁目四四、日本商事株式會社

●二宮　俊二君(一五)　退營・從前の通り十五銀行丸の内支店に復職 ●(現住)　東京市牛込區若松町一二三、久保島方

●野村　俊吉君(五)　三井物産會社退社、渡米・後便ハ追テ詳報

●中村　作一君(一〇)　病氣の爲め帝國製鉄を辭し郷里津名郡由良町にて靜養中

●任　兢　淳君(一二)　轉勤・朝鮮大邱府市場町株式會社愛一銀行

●中谷　俊明君(一五)　六月一日より大阪歩兵第八聯隊第三中隊へ編入

Oの部

●岡本　眞一君(一五)　轉居・東京府豐多摩郡杉並村大宮高圓寺一〇七、富士見館

●沖　豐治君(一五)　中隊移轉・金澤歩兵第七聯隊第一中隊

Sの部

●榊原　元一君(八)　現住・東京麻布北豐島郡巣鴨町一〇九二、

●島貫　武雄君(一六)　現住・東京市赤阪區溜池二四、坂間君一方

●坂上　和夫君(一五)　六月一日より大阪歩兵第八聯隊第三中隊へ編入

Tの部

●田村　純一君(一〇)　轉任・ c/o Toyo Menka Kaisha, Ltd., P. O. Box No. 1 Bombay

●竹村　奠吉君(五)　轉任・ c/o Mitsui Bussan Kaisha, Ltd., Prince's Buildings, Ice House St, Hongkong.

●谷岡　孝一君(一六)　轉任・大阪府南海線鶴井驛前吉見織株式會社樟井支店

●田中　勇雄君(一一)　轉任・横濱市山下町大阪商船株式會社横濱支店 ●(現住)　東京府下入新井町新井宿字長田一一四番地

●田和淳二郎君(一六)　轉任・大阪市北區都島友淵鐘紡淀川支店取引係

●富成　宮吾君(一五)　入營中之處今般遞後被免大阪市東區安土町三丁目株式會社大阪野村銀行本店へ就職

●丹根　文雄君(八)　倫敦支店勤務を命ぜられ六月十日横濱解纜の春洋丸にて赴任 c/o Mitsui & Co., Ltd., Nos. 31-33 Lime St., London, E.C.3.

●田中　守一君(六)　神戸市吉吉町一〇二(國際會場の東隣り)に於て廣大なる印刷所設定、營業は七月一日より開始、最新式の輪轉機を最近の鮮明なる活字と熟練せる技術員の協力によつて稿文歌文共に迅速鮮明、廉價に需要に應ずと(振替印刷所電話三宮一六〇六)

●淵　純一君(一〇)　轉任・東洋綿花株式會社孟買支店へ(轉任七月二十七日神戸出帆榛名丸にて赴任の筈 c/o Toyo Menka Kaisha Ltd., P.O. Box No. 1 Bombay.

Wの部

●和田　信純君(一六)　現住・京都市上京區竹屋町通り千本東入南木正德方

Yの部

●山田　直之介君(一五)　仙臺高等工業學校第四聯隊留守隊第三中隊に編入

●山代　博助君(一六)　轉居・臺北市鷲巣町三ノ一七、臺灣銀行合宿舎

●山田　金吉君(七)　五月三十一日を以て原商事株式會社東京本店へ轉任 ●(現住)　東京市牛込區矢來町八番地ノ九號

●吉田　清作君(一四)　轉住・神戸市富町八一、太洋海運株式會社 ●(現住)　神戸市葺合町中尾十二號太洋海運社宅

●米尾　成治君(一六)　現住・大阪市外住吉公園西長峡橋西詰

●吉田茂太郎君(一五)　上海不破洋行組織變更・大阪市東區南久太郎町二丁目株式會社丸永商店と改稱六月十二日歸朝本店詰

●吉田鐵次郎君(一三)　視察旅行の爲め六月十四日神戸出帆のボルネオ丸にて南洋方面へ出發(郵便宛先)c/o Marufuku & Co, Batavia.

●竹内保夫先生御轉居
神戸市野崎通六丁目住友銀行甲南寮

端艇部擴張資金寄附拂込報告

(六月二十八日迄)

一、二口金拾圓宛　秋葉　四郎君　西　賴太郎君
　服部　春一君(但第二回拂込)　辻川新十郎君
一、四口金貳拾圓　永井幸太郎君
一、六口金參拾圓　竹田龍太郎君
一、二十口金壹百圓　藤田　勝一君　シドニー同窓諸兄
　卜部　卓江君　片桐　吾郎君　戸田　壽生君
　内海　峯二君　中田友治郎君　田中　駒吉君
　谷口三樹三郎君　大川　重三君　永井　唯一君
　米田健一郎君　綱谷　福造君
小計金貳百九拾圓也
累計金貳千七拾九圓拾四錢也

編纂後記

○近頃になく内容の充實したものが、出來上つて嬉しいと思ふ。教授方の玉稿をはじめ、學友諸兄の眞摯な研究の結果が澤山集つて來たので編纂子の歡喜は限ない。何も本號ばかりでない、これからも愈〻内容の充實せらるゝことゝ信じて幾度か叫ばるゝ筒臺文化の發展に盡したいと思つてゐる。次に

○本號想華方面の寄稿は空前の盛況を呈した。隨つて限られた紙面に盛らるゝことの出來なかつたものが尠くない。中にも卒業生某氏から長篇の戯曲の力作を賜つたがつひに工面が出來なかつた。どうか惡しからず。

○原稿は此の頃は一般に前より甚だ叮嚀に認められる樣になつたが、尚ほ此の上に一層の明瞭さが欲しい。煩雜な植字、校正は勞を惜しむのではないが、全くの無駄骨でこんな不經濟な事はない。吳々もこれは留意して載きたい。

○休暇も愈〻數日の中に迫つた。仲夏の一夕山路をそゞろゆくとき、そして群れ來る雲の峯が映ゆるとき、見給へ。薄れゆく夕やみのうち、遠く街の灯、巷の光がキラ／＼し出すのだ。泌々と甘いノスタルヂヤはいつのまにか涌き出でゝ來て耐らなく惹きいれられる。我を待つ故郷の山々は奈何に。

○休み中は旅衣よし、山よし、海よし、また都會の海底に沈みゐるもよからう。將、又、田園の憂鬱に浸るのも勿論よい。編纂子は首を長くして大きな收穫の飛びこんで來るのを待つてゐる。尚、終に

○本號に就ては始めての經驗でもあり、數々他の委員の人々にも存外な迷惑をかけた。そして今此の校正に際してもわざ／＼大手潤を筧の十二時までも明輝社に引きとめて一方ならぬ手助けをして貰つたので本號なども同君その他に負ふところが非常に多いことを附記しておく。

(六日夜校正場にて　ひろた生)

八月號休刊
次號　原稿締切　九月一日
發行　發行　九月十五日
九月號の原稿は校内編纂部編輯室宛御郵送下さい
十月號(記念祭號)
原稿締切　十月十日
發行　十月二十五日

大正十一年七月八日印刷
大正十一年七月十日發行　(非賣品)
編輯兼發行人　兵庫縣武庫郡西灘村森三十番地　窪田安次郎
印刷人　兵庫縣神戸市三宮町一丁目三百廿番邸　辻仁三郎
發行所　神戸高等商業學校學友會

不景氣の襲來に

友よ勇敢なれ!!

大敵に會へる——武人の如く
難問に面せる——學者の如く
苦鬪するも亦——壯快ならずや

品質優良
明治二十五年創業
荷造完全

吉田硫黄本舗　吉田長祥

本店　大阪市北堀江三番町
支店　小樽區堺町本通七六
出張所　神戸市京町八一カネコ組

大正十一年九月二十日發行

學友會報

第百六十號

神戸高等商業學校學友會